

長岡市文化財調査報告書

第 46 冊

2 0 0 4

長岡市教育委員会

編 集 財團法人長岡市埋蔵文化財センター

長岡市文化財調査報告書

第 46 冊

2 0 0 4

長岡市教育委員会

編 集 財団法人長岡市埋蔵文化財センター

惠解山古墳第4次・長岡京跡右京第783次調査

卷頭図版



(1) 空から見た恵解山古墳と第4次調査地



(2) 第1調査区の葺石検出状況（北東から）

長岡京跡右京第789次調査

卷頭図版二



開田城西側の土塁と堀（南東から）

序 文

昭和29年暮れに中山修一氏らにより始まった長岡京跡の発掘調査は、今年で50年目を迎えます。文献でしか知られなかった長岡京は、いまや“実在した都”として広く知られるようになりました。ただ、その道のりは決して平坦なものではありませんでした。宅地開発の波の中で、長岡京跡は消滅の危機にさらされ、調査体制・調査費用の確保や遺跡保存が絶えず問題となりました。しかしながら、長岡京解明への熱い思いは大きな輪となり、やがて行政を動かし、長岡宮大極殿、内裏跡などが国指定史跡として保存されるようになって行きました。

長岡京跡発掘50年を迎えるにあたり、中山修一氏をはじめ、長岡京解明に寄せられた多くの方々の労苦に対して深く敬意を表すとともに、調査研究の到達点を明らかにし、これから50年間にむけての出発点として調査研究のために努力していくたいと思っています。

さて、ここに刊行します報告書は、国・府補助事業として平成15年度に実施した発掘調査成果をまとめたものです。なかでも、乙訓地域最大の前方後円墳である恵解山古墳(久貝二丁目)の発掘調査では、前方部前端の裾部に施された葺石が確認され、前方部の幅がより広がることがあきらかになるなど、古墳の規模・構造を知る上で大きな成果を得ることができました。また、中世の村の城として知られる開田城(天神一丁目)では、城を囲む土塁や堀の調査が行われ、現存する遺跡が数少ない中でそれらの構造を解明することができるなど貴重な成果をあげることができました。

最後になりましたが、調査にあたり種々のご指導をいただいた諸先生方、調査を担当していただいた財團法人長岡市埋蔵文化財センターなどの関係機関、また、発掘調査にご協力をいただきました土地所有者や近隣の皆様方に紙面をお借りして深く感謝いたします。

平成16年3月

長岡市教育委員会

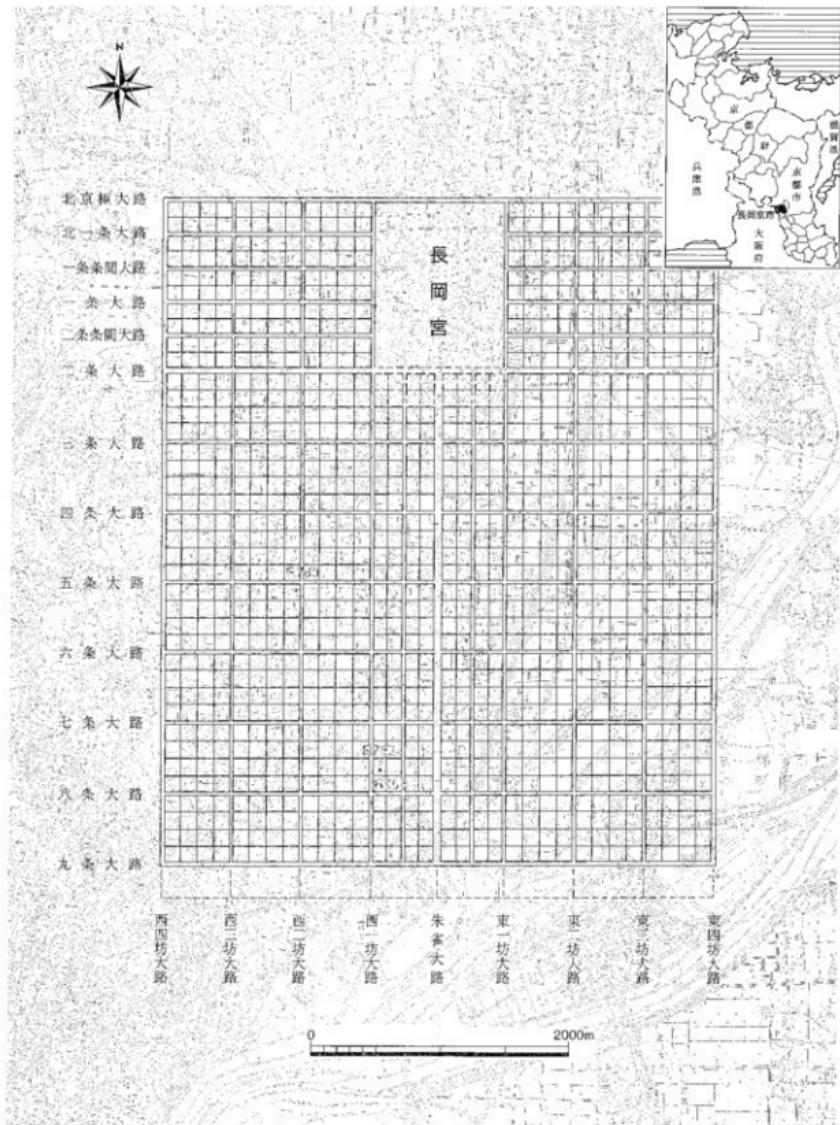
教育長 芦田富男

凡　　例

1. 本書は、長岡京市教育委員会が平成15年度に国庫補助事業として実施した発掘および整理調査の概要報告である。調査対象地は付表1、その位置は第1図に示した。
2. 長岡京跡の調査次数は、右京城、左京城ごとに通算したものである。調査地区名は、京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1977）』の旧字名を基にした地区割に従った。
3. 長岡京の条坊復元は、山中草『古代条坊制論』『考古学研究』第38巻第4号（1992年）の復元案に従った。
4. 本書で使用する地形分類については、とくに断らない限り「長岡京市地形分類図」「長岡京市史資料編一」（1991年）に従った。
5. 長岡京跡の調査で使用している正式な遺構番号は、調査次数+番号であるが、報告によっては煩雑さを避けるため、調査次数を省略している場合がある。
6. 本書の国土座標値は、旧座標系の第VI系を使用している。
7. 本書挿図の土層名で（ ）を付して示した記号は、『新版標準土色帖』（1997年版）のJIS表記法による土色である。
8. 現地調査および本書作成に至るまでの整理・製図作業には、多くの方々のご協力を得た。
9. 各報告の執筆者は、各章のはじめに記した。
10. 本書の編集は、（財）長岡京市埋蔵文化財センターが行った。

付表-1 本書報告調査一覧表

調査次数	地区名	所 在 地	現地調査期間	調査面積	備考
長岡京跡右京 第765次	7ANQUD-7	長岡京市久貝二丁目 216	2003年2月10日 ～ 2003年3月18日	336m ²	南栗ヶ塚遺跡
長岡京跡左京 第484次	7ANMST-8	長岡京市神足芝本 8・9・10	2003年2月27日 ～ 2003年3月31日	48m ²	雲宮遺跡 芝本遺跡
恵解山古墳 第4次 長岡京跡右京 第783次	7ANQMK-4	長岡京市勝竜寺1204、 久貝二丁目813・814	2003年8月11日 ～ 2003年11月10日	179m ²	恵解山古墳 南栗ヶ塚遺跡
閔田城跡 第5次 長岡京跡右京 第789次	7ANKSC-8	長岡京市天神一丁目 313-1・313-4	2003年10月1日 ～ 2003年11月5日	163m ²	閔田城跡 閔田城ノ内遺跡



第1図 本書報告調査地位置図(1/40000)

本文目次

第1章 長岡京跡右京第765次（7ANQUD-7地区）調査概要.....	1		
1 はじめ	2 調査経過	3 検出遺構	4 出土遺物
5 まとめ			
第2章 長岡京跡左京第484次（7ANMST-8地区）調査概要.....	7		
1 はじめ	2 調査経過	3 検出遺構	4 出土遺物
5 まとめ			
第3章 恵解山古墳第4次・長岡京跡右京第783次（7ANQMK-4地区）調査概要.....	11		
1 はじめ	2 調査経過	3 検出遺構	4 出土遺物
5 まとめ			
第4章 長岡京跡右京第789次（7ANKSC-8地区）調査概要	23		
1 はじめ	2 調査経過	3 検出遺構	4 出土遺物
5 まとめ			

図 版 目 次

- 卷頭図版 1 (1) 空から見た恵解山古墳と第4次調査地
 (2) 第1調査区の葺石検出状況（北東から）
 卷頭図版 2 開田城西側の土壘と堀（南東から）

長岡京跡右京第765次調査

- 図版 1 (1) 調査区全景（南東から）
 (2) 調査区全景（北西から）
 図版 2 (1) 調査区土層堆積状況（北西から）
 (2) 井戸 S E 04（北から）

長岡京跡左京第484次調査

- 図版 3 (1) 碓敷遺構検出面全景（南から）
 (2) 碓敷遺構検出状況（北から）
 (3) 碓敷遺構と流路（北から）
 (4) 長岡京期全景（南東から）
 (5) 長岡京期全景（北東から）

恵解山古墳第4次・長岡京跡右京第783次調査

- 図版 4 空から見た恵解山古墳と調査地
 図版 5 (1) 第1調査区全景（東から）
 (2) 第1調査区葺石検出状況（南西から）
 図版 6 (1) 第2調査区全景（東から）
 (2) 第2調査区葺石検出状況（南東から）

長岡京跡右京第789次調査

- 図版 7 (1) 発掘調査地全景（南東から）
 (2) 発掘調査地全景（東から）
 図版 8 (1) 開田城西側土壘（南から）
 (2) 土壘と西側の堀（南西から）
 図版 9 (1) 南北トレンチ全景（北から）
 (2) 南北トレンチ全景（南から）

- (3) 東西トレンチ全景（西から）
(4) 東西トレンチ西部（東から）
図版10 (1) 東西トレンチ東部（西から）
(2) 東西トレンチ西部下層遺構（東から）
(3) 出土遺物

挿 図 目 次

第1図 本書報告調査地位置図 (1/40000)	iii
--------------------------------	-----

長岡京跡右京第765次調査

第2図 発掘調査地位置図 (1/5000)	1
第3図 調査区土層図 (1/80)	3
第4図 検出遺構図 (1/200)	4
第5図 出土遺物実測図 (1/4)	5
第6図 石器実測図 (1/2)	6

長岡京跡左京第484次調査

第7図 発掘調査地位置図 (1/5000)	7
第8図 調査区土層図 (1/100)	8
第9図 碓敷遺構S X32実測図 (1/40)	9
第10図 長岡京期検出遺構図 (1/100)	10

恵解山古墳第4次・長岡京跡右京第783次調査

第11図 発掘調査地位置図 (1/5000)	11
第12図 調査作業風景（西から）	12
第13図 現地説明会風景（南から）	12
第14図 恵解山古墳の調査区配置図 (1/1000)	13
第15図 第1調査区検出遺構図 (1/100)	15・16
第16図 第2調査区検出遺構図 (1/100)	19・20

長岡京跡右京第789次調査

第17図 発掘調査地位置図 (1/5000)	23
第18図 発掘調査風景（南西から）	25
第19図 現地説明会風景（南から）	25
第20図 検出遺構図 (1/100)	27・28
第21図 調査地土層図 (1/100)	29・30
第22図 井戸S E 04・05実測図 (1/50)	32
第23図 壑穴住居 S H09実測図 (1/50)	33

第24図 出土遺物実測図 (1/4)	36
第25図 開田城周辺調査地位置図 (1/1000)	39

付 表 目 次

付表-1 本書報告調査一覧表	ii
付表-2 報告書抄録	40

第1章 長岡京跡右京第765次（7ANQUD-7地区）調査概要

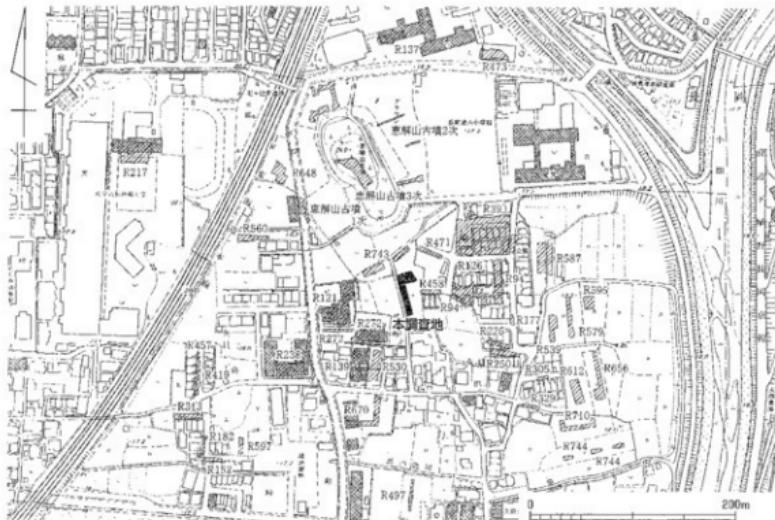
-長岡京跡右京八条一坊十四町、南栗ヶ塚遺跡-

1はじめに

- 1 本報告は、2003年2月10日から3月18日まで、京都府長岡京市久貝二丁目216において実施した長岡京跡右京第765次調査の整理報告である。
- 2 現地調査は、平成14年度の国庫補助事業として、国史跡に指定されている恵解山古墳の周辺部での遺構・遺物を確認することに主眼をおき、合わせて長岡京跡右京八条一坊十四町および南栗ヶ塚遺跡に関係する資料を得ることを目的とした。調査面積は336m²である。
- 3 整理作業は、平成15年度の国庫補助事業として長岡京市教育委員会から委託を受けた（財）長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現場ならびに整理作業は、同センター総括主査の山本輝雄が担当した。
- 4 本報告の編集および執筆は、山本が行った。

2調査経過

JR京都線長岡京駅から約1000m南に所在する恵解山古墳は、全長約120mの規模を有する桂



2 調査経過

川右岸流域では最大級の前方後円墳で、古墳時代中期の前半に築造されたものと考えられている。今回の調査地は、その恵解山古墳から約30mほど南に位置する水田で、地形的には地表面での標高が15.1m前後の氾濫原Ⅰ上に立地している。氾濫原Ⅰは、比較的高燥な面で、洪水の影響をあまり受けることがなかったとされ、すぐ西側には段丘崖が北西から南東の方向に延びている。

調査地の周辺では、これまでに北側で右京第471次調査と同第743次調査⁽¹⁾（東調査区）が、またすぐ東側では右京第458次調査⁽²⁾が行われている。それらの調査においては、古墳に関係する遺構、遺物は確認されなかったが、中世の土坑や遺物包含層、平安時代を下限とする溝や落ち込みなどが確認されており、また長岡京期の遺物も出土していた。

今回の調査にあたっては、幅約6m、長さ約40mの南北に長い調査区を設定し、2月10日に重機で耕作土や床土などを掘り下げることから始めた。そして、2月12日から作業員を動員して遺構検出のための精査を行った結果、調査区の北部で近世以降と考えられる溝、井戸などが確認されるとともに、調査区の南半部では長岡京期の遺物を含む堆積層を確認することができた。そこで、それらの遺構を追究するため、2月21日から調査区の北部を東側に重機で拡張し、さらに調査を進めた。そして、2月27日から平面図の作成に着手し、3月12日に全景写真の撮影、3月14日に埋め戻しを行い、現地での調査が終了したのは3月18日であった。

3 検出遺構

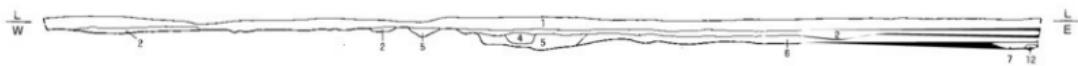
基本層序 調査区は南北に細長いため、場所によって層序に相違が認められた。調査区の北部では、耕作土（第1層）、床土（第2層）の直下が黄褐色～黄白色砂質土の地山面であるのに対して、南半部では上から耕作土、床土、暗灰色砂質土（第3層）、茶灰色粘質土（第4層）、黒褐色疊混り土（第5層）、黒褐色粘質土（第6層）の順で堆積し、地表下約0.6mほどで地山面に至っていた。第4層には土師器、須恵器、綠釉陶器、青磁、瓦器が、また第5・6層には土師器、須恵器、瓦など長岡京期の遺物を包含していた。第5・6層は、長岡京期の整地層とも考えられたが、確証は得られなかった。地山面は、北西から南東に向かって緩やかに傾斜しており、その標高は調査区の北西端部で約14.9m、南東隅部で約14.45m、拡張区の南東隅部では約14.5mほどであった。遺構は、すべて地山面上において検出した。

溝 S D01 調査区の南端部で検出した北西から南東の方向に延びる素掘りの溝である。幅0.8～1.9m、深さ約0.05mほどの規模があり、埋土は、淡灰褐色砂質土と淡灰褐色粘質土が堆積しており、陶器の細片が少量出土したのみである。

溝 S D02 調査区の北部で検出した北北東から南南西に延びる素掘りの溝である。幅約0.3m、深さ約0.1mほどの規模で、埋土は暗灰褐色疊混り土が1層堆積しており、土師器と須恵器の細片が少量出土している。

溝 S D03 S D02のすぐ東側に位置し、それとほぼ平行に走る素掘りの溝である。2段に掘り窪められており、幅約1.8m前後、深さは1段目が0.15m、2段目が約0.2mほどである。埋土は、S D02と同じ暗灰褐色疊混り土で、土師器、陶磁器などの破片が少量出土している。

調査区・拡張区北壁



拡張区東壁



拡張区南壁



調査区東壁

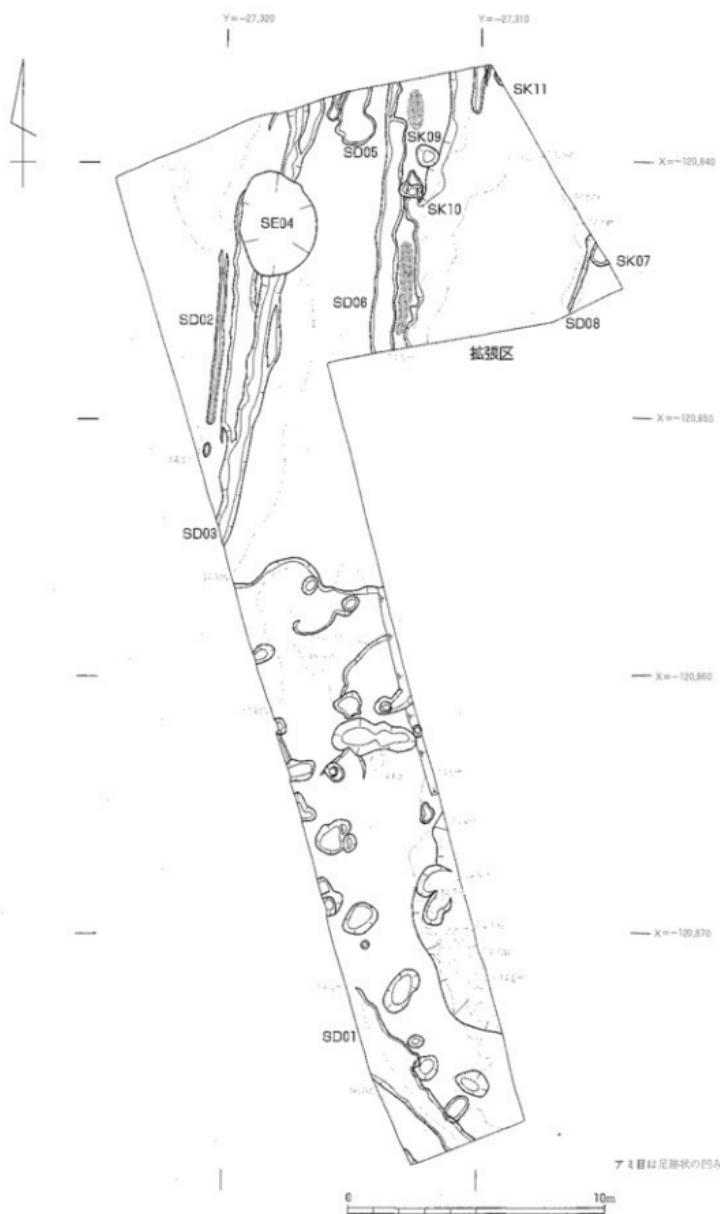


調査区南壁



- | | |
|------------|----------------|
| 1 耕土 | 8 黒褐色雜混り土 |
| 2 床土 1 | 9 黒褐色粘質土 |
| 3 床土 2 | 10 緑茶灰褐色雜混り粘質土 |
| 4 淡灰色砂礫 | 11 灰色粘質土 |
| 5 暗灰褐色雜混り土 | 12 茶褐色粘質土 |
| 6 暗灰褐色砂質土 | 13 暗灰白色粘質土 |
| 7 茶褐色粘質土 | |

4 検出遺構



第4図 検出遺構図(1/200)

井戸 S E 04 調査区の北部で検出した平面形が長楕円を呈する井戸である。東西約3m、南北約4mほどの規模で、深さ約1.7mまでを確認したが、湧水があり、しかも壁面が大きく袋状に抉れて崩壊する恐れがあったため、それ以上掘り下げるこことを断念した。埋土は、灰色系の粘土と砂礫の互層で、遺物はわずかに陶磁器の細片が少量出土したのみである。

溝 S D 05 拡張区の北部で検出した南北方向の素掘り溝で、北から約2.1mの地点で途切っていた。幅1~1.5m、深さは0.05mで、遺物は何も出土しなかった。

溝 S D 06 拡張区のはば中央部で検出した南北方向の素掘り溝である。幅0.8~0.9m、深さ約0.15mほどの規模があり、埋土は暗灰褐色疊混り土である。この溝のすぐ東側には、足跡状の小さな窪みが多数認められた。

土坑 S K 07 拡張区の南東部で検出した不整形な土坑で、東半部は調査区外に延びている。南北約m0.9m、東西0.5m以上、深さ約0.25mほどの規模があり、埋土は暗茶灰色砂混り粘質土と灰色粘質土の上下2層である。

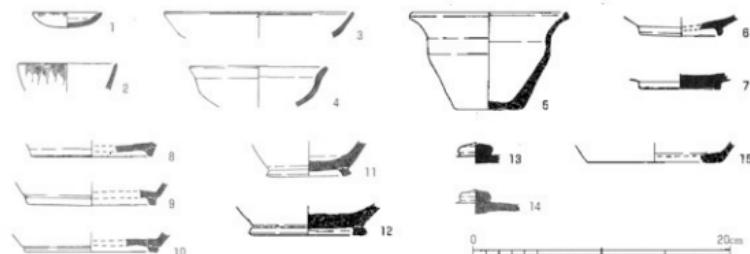
土坑 S K 09 S D 06のすぐ東側で検出した不整形な小土坑で、径約0.8m前後、深さは約0.3mほどある。

土坑 S K 10 S K 09のすぐ南西で検出した不整形な小土坑である。

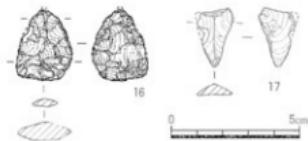
この他、調査区南部において、不整形を呈した土坑状の小さな窪みをいくつか検出したが、それらには黒褐色粘質土（第6層）が堆積しているのみで、須恵器の破片を少量出土するものが少數あるにすぎなかった。

4 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師器、須恵器、黑色土器、瓦器、陶磁器、瓦などがあるが、数量は整理箱に1箱程度しかなく、調査面積の割には出土量がきわめて乏しいといえる。また、遺構から出土した遺物は乏しく、その大半は第5・6層から出土した長岡京期の土師器や須恵器、それに瓦などである。



第5図 出土遺物実測図 (1/4)



第6図 石器実測図 (1/2)

1はSD03から出土した土師器の小皿で、口径5.5cm、器高が1.2cmある完形品である。口縁端部には油煙の痕跡をとどめ、灯火器として使用されたものであることが知られた。2もSD03から出土した染め付け椀の破片で、口径7.6cm、器高は2.2cm以上ある。

3は口径が14.8cmに復元できる土師器の皿Aである

る。全体に磨滅しており、外面の調整は不明であった。4は土師器の壺Cで、口径は10.9cmに復元できる。上記の土師器は、ともに長岡京期のものと推察される。

5は平底の底部と肩部が張り、大きく広がる口縁部をもつ須恵器の壺Hである。焼成が甘くて色調は淡灰褐色を呈している。口径12.5cm、器高7.5cmに復元できる。8~10は須恵器杯Bの底部片で、高台径は9.6~10.6cmほどあり、13・14は須恵器杯B蓋のつまみ片である。11・12は須恵器の壺Lではないかと考えられる底部の破片である。とともに外側に張り出した高台を貼り付けており、11は高台径6.6cm、12は9.2cmである。15は須恵器杯Aの底部片で、底径は10.4cmに復元できる。10が第4層、11・14が第5層、5・8・9・13・15が第6層からそれぞれ出土しており、いずれも長岡京期に比定することができる。

6は、第4層から出土した灰釉陶器椀の底部片である。ケズリ出しによる輪高台で、径は6.6cm、硬質に焼成されている。7は、第4層から出土した綠釉陶器の椀もしくは皿の底部片である。ケズリ出しによる蛇の目高台で、径は6.4cmある。硬質に焼成されており、淡い緑色を呈した釉が施されている。これらの陶器は、平安時代前期のものと考えられる。

16は、サスカイト製の打製石槍の先端部ではないかと考えられる。現存長2.8cm、最大幅2.2cm、厚さは0.8cmある。17はサスカイトの剥片で、長さ2.3cm、幅1.4cmある。全体に風化が進行しているため、灰色を呈する。16・17は、ともに第4層から出土。

5 まとめ

以上みてきたように、今回の調査では、恵解山古墳に関係する遺構・遺物はもとより、顕著な遺構を確認することはできなかった。ただし、傾斜面上に堆積する土層から長岡京期の遺物が出土したことは重要で、遺構は検出されなかったが、右京八条一坊という京の南部における造営の進捗状況を知る上で間接的な手がかりなるものと考えられる。

注1) 原 秀樹「右京第471次調査概報」「長岡京市センター年報」平成6年度 1996年

2) 山本輝雄「長岡京跡右京第743次調査概要」「長岡京市報告書」第45冊 2003年

3) 原 秀樹「右京第458次調査概報」「長岡京市センター年報」平成5年度 1995年

第2章 長岡京跡左京第484次調査（7ANMST-8地区）調査概要

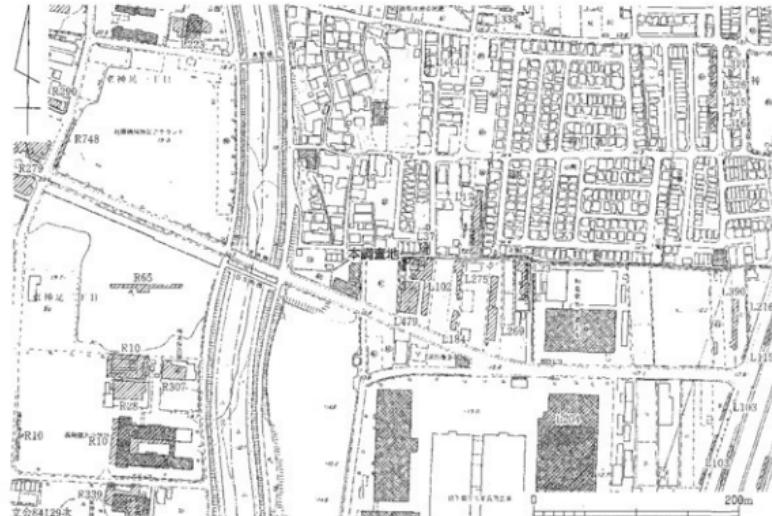
一長岡京跡左京六条一坊五町、雲宮遺跡、芝本遺跡一

1はじめに

- 1 本報告は、2003年2月27日から2003年3月31日まで、京都府長岡京市神足芝本8・9・10において実施した長岡京跡左京第484次調査の報告書である。
- 2 本調査は、長岡京跡左京第102・479次調査で検出された碟敷遺構の範囲確認を目的として実施した。調査総面積は48m²であった。
- 3 発掘調査は、平成14年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり、(財)長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は同センター主査の中島皆夫が担当した。
- 4 左京第479次調査の調査成果については『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第32集（2003）を参照願いたい。また、前記報告書では本調査の内容を含めた記述を行っている。
- 5 本報告の執筆・編集は中島が行った。

2 調査経過

本調査は左京第479次調査の北調査区で碟敷遺構が検出されたため、碟敷の西側への広がりを確認するために実施したもので、左京第479次調査北調査区に接続するよう、南北12m、東西4



mの調査区を設定している。調査は2月27日より重機掘削を開始し、当初の目的どおり礫敷遺構の広がりを確認することができた。礫敷は調査区の北東部で途切れており、この部分では礫が南北方向に面を揃えている。また、礫敷遺構の検出面では長岡京期の溝を中心とした遺構群を確認している。調査作業は3月31日までに重機による埋戻し、機材撤去などが終了し現地作業を完了した。なお、調査区の中心は旧国土座標第VI座標系のY = -26,614、X = -119,877に位置する。

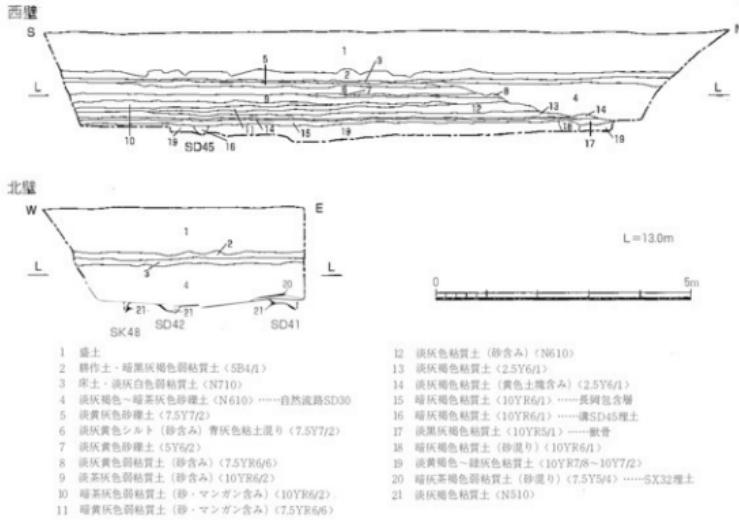
3 検出遺構

(1) 基本層序（第8図）

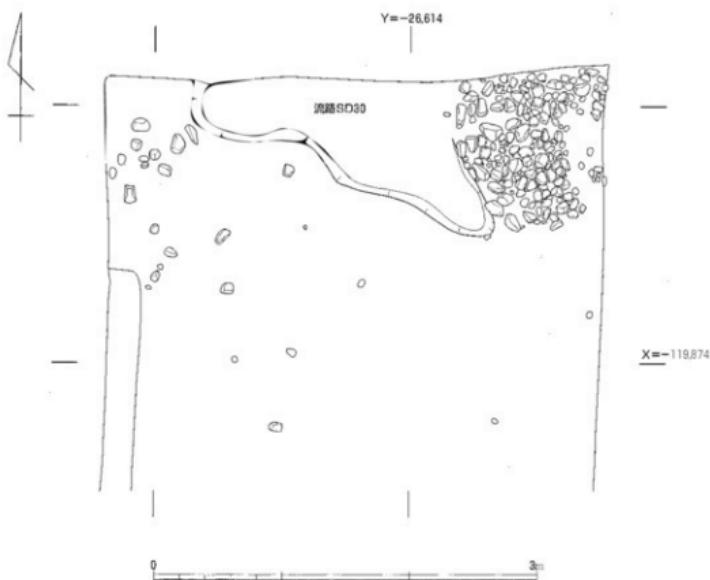
上から第1層の盛土、第2層の耕作土、第3層の床土、第7層の淡黄灰色砂礫土、第8層の淡灰黄色シルト、第13層の淡茶灰色弱粘質土、第14層の暗茶灰色～黄灰色弱粘質土（マンガン含み）、第17層の淡灰色粘質土（砂含み）、第19層の淡灰褐色粘質土、第22層の淡灰茶色粘質土、第23層の暗灰褐色粘質土、第12層の淡黄褐色粘質土～淡緑灰色シルトに至る。左京第102次調査の基本層序のうち、中世遺物包含層の第5層が本調査の第14層、長岡京期遺物包含層の第6層が本調査の第23層に対応する。

(2) 検出遺構

自然流路 S D 30（第8・9図） 調査区の北西部で自然流路を1条検出した。流路の方向は北西から南東方向で、流路は耕作土、床土直下の第7層から掘り込まれている。流路堆積の最も深い部分は長岡京期の遺構検出面である第38層にまで達していた。流路堆積層（第6層）は砂利・粗砂が主体を占めるが、少量ながらも拳大の礫が含まれていた。



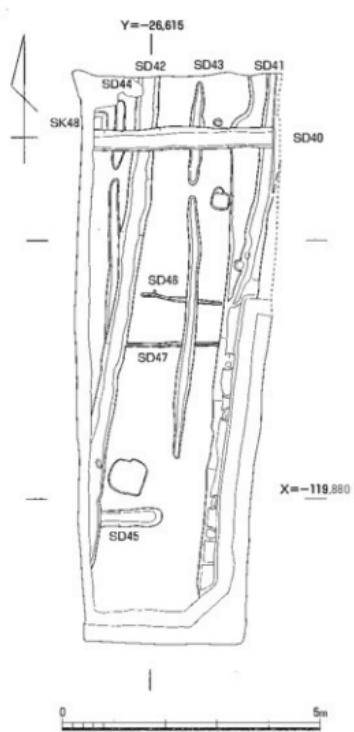
第8図 調査区土層図 (1/100)



第9図 碟敷造構 S X 32 実測図 (1/40)

碟敷造構 S X 32（第9図）左京第479次調査より続く碟敷が調査区の北東部で検出された。前述のように本調査区では碟敷が途切れる状況を確認しており、この部分を西限とした場合、碟敷造構は左京第102次調査と併せて東西22m以上、南北約2.5mの範囲に及ぶものと考えられる。ただ、西限と想定した範囲は自然流路 S D 30の影響を受けており、碟敷造構の西限がさらに西側に存在する可能性も残されている。碟敷造構 S X 32は明確な掘り込みを伴っておらず、とくに本調査では南辺のみの確認となったため、原位置を保つ碟の特定が非常に困難であった。碟敷は西から東へ傾斜しているが、左京第479次調査区を含む東西18m内の比高差は上面で0.15m、下面では0.25mを測る。

碟敷造構は碟と細砂からなる基本構造などから、東側ないし南東側への排水を効率的に行い、恒常的な滞水地盤を改善するために築かれたものと考えられる。左京第479次調査北調査区では碟敷造構を覆う淡灰色粘質土に中世の土師器、瓦器や獸骨が含まれており、左京第102次調査の知見を考慮すれば碟敷造構は中世段階に構築された可能性が想定される。しかし、碟敷造構 S X 32の碟を完全に除去した段階で、調査区の東半部では碟間に施された細砂と同様な土で埋められた窪みが確認され、この窪みから平安時代中期の綠釉陶器が出土している。また、本調査区の碟敷造構 S X 32は上層からの明確な掘り込みを確認することができず、長岡京期の溝群とはほぼ同じ面から築かれたと考えられる。碟敷造構の構築時期を平安時代と考えた場合、淡灰色粘質土から出土した大量の中世遺物は後世の耕作に伴う搅拌によって碟と混ざり合ったものと想定できる。



第10図 長岡京期検出遺構図 (1/100)

轍 S D 46・47（第10図）調査区の中央部では東西方向の轍2条を検出した。轍の方向は西で北へ3°程度振っており、左京第479次調査南調査区の轍群のなかに共通する方向の轍が認められる。轍の時期は長岡京期以前と考えられる。

4 出土遺物

本調査では長岡京期の土師器、須恵器、瓦、中近世の陶磁器などが出土したが、その量は少なく図示し得るものもなかった。

5 まとめ

本調査では疊敷遺構 S X 32の西限と推定できる状況を確認した。しかし、この部分は後世の流路堆積の影響を受けており、残念ながら遺構の西限を確定するには至らなかった。また、疊敷が如何なる目的で施されたのかについて推測の域を超える資料は得られていない。疊敷遺構の北辺や東限などを追求するための調査が望まれる。

溝 S D 40（第10図）左京第479次調査の北調査区から左京第484次調査区の北辺を貫く東西溝である。溝は長岡京期の遺構群のなかでも最も新しいもので、幅0.3~0.5m、深さ0.1~0.3mを測り、底部は緩やかに西から東側へ傾斜していた。

溝 S D 41・42（第10図）溝 S D 41・42は真北に対して8°前後東へ振る長岡京期の南北溝で、溝 S D 40に切られるものの、後述する溝 S D 43~47より新しい時期の遺構である。幅0.2~0.5m、深さ0.15~0.3mを測り、幅広の溝 S D 41は二段掘り状を呈していた。

溝 S D 43・44（第10図）幅0.15m前後、深さ0.1mに満たない小規模な南北溝である。溝の方位は北で東へ5°振っており、両溝の間隔は約1.5mを測る。西側の溝 S D 44は南北溝 S D 42に切られている。長岡京期と考えられる。

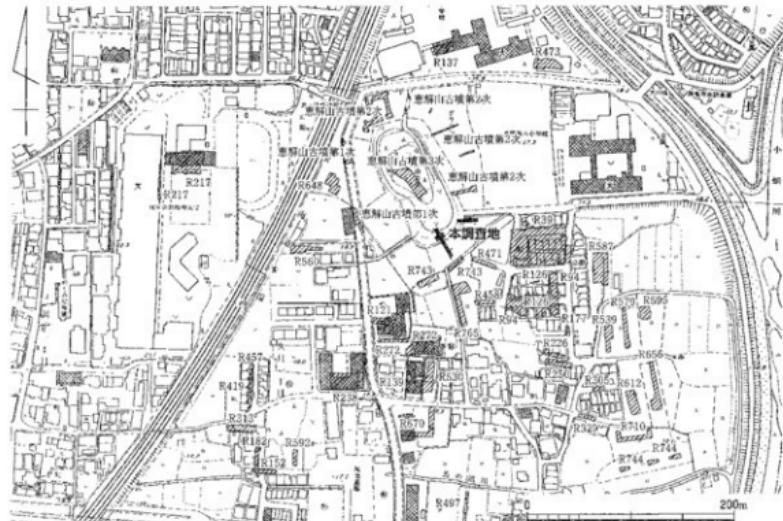
溝 S D 45（第10図）調査区の南部で検出した長岡京期の東西溝で、幅0.3m程度で深さ約0.2mを測る。溝 S D 42によって切られていたが、溝 S D 43・44や轍 S D 46・47とは重複関係を有さない。溝 S D 45は左京第102次調査の溝 S D 35に連続するものと考えられる。

第3章 恵解山古墳第4次・長岡京跡右京第783次 (7ANQMK-4地区) 調査概要

- 恵解山古墳、長岡京跡右京八条一坊十四町、南栗ヶ塚遺跡 -

1 はじめに

- 1 本報告は、2003年8月11日から11月10日まで、京都府長岡京市勝竜寺1204、久貝二丁目813・814において実施した恵解山古墳第4次調査および長岡京跡右京第783次調査に関する概要報告である。
- 2 調査は、国史跡に指定されている恵解山古墳の墳形とその規模を確認することに主眼をおき、合わせて長岡京跡右京八条一坊十四町および南栗ヶ塚遺跡に関する資料を得ることを目的とした。調査面積は179m²である。
- 3 発掘調査は、平成15年度の国庫補助事業として長岡京市教育委員会から委託を受けた(財)長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地での調査は、同センター総括主査の山本輝雄が担当した。
- 4 現地調査では、中尾芳治(帝塚山大学)、都出比呂志(大阪大学)、和田晴吾(立命館大学)、橋本清一(山城郷土資料館)、丸川義広(京都市埋蔵文化財研究所)、梅本康広(向日市埋蔵文化財センター)の各氏より種々の御教示を得た。特に、橋本氏には、葺石の石材について分



析していただいた。

5 本報告の執筆ならびに編集は山本が行ったが、今回は概要を記すにとどめ、詳しい報告については調査の最終年度にまとめて行う予定である。

2 調査経過

恵解山古墳は、標高15~16m前後の氾濫原Ⅰ上に立地する古墳時代中期に築造された前方後円墳である。全長約120m、後円部径約60m・高さ約8m、前方部幅約55m・高さ約6.5mほどの規模で、周囲に幅約30mほどの盾形周濠が復元されており、桂川の右岸流域では最大級の首長墳と考えられている。

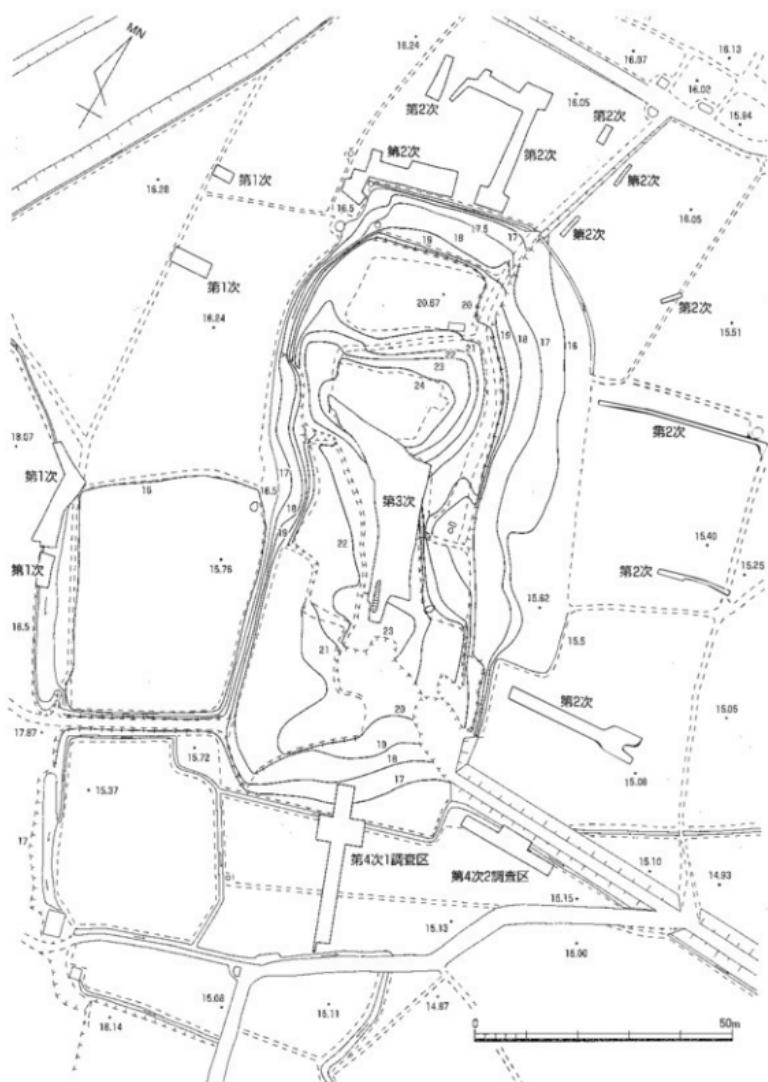
当古墳は、1968（昭和43）年に京都府教育委員会が墳丘の測量を行って以降、これまでに3次にわたる発掘調査が長岡市教育委員会によって行われている。特に1980（昭和55）年に行われた第3次調査では、墳丘西側クビレ部の葺石をはじめ、前方部のほぼ中央部で副葬品のみを納めた埋納施設が確認され、そこから刀、剣、鎌などの武器類を主体とする鉄製品が700点余りも出土したことにより、全国的に注目を受けることになった。そして、1981（昭和56）年10月13日に国の史跡として指定され、後世に保存されることが決定した。その後、用地の買収が年々進められ、20年余りを経た2002（平成14）年度末までようやく史跡指定全域の公有化が完了するに至った。これに伴い長岡市では、古墳を近い将来史跡公園として整備し、市民に広く活用を図る施策を計画した。そこで、整備の計画を立案するため、墳丘や周濠の形態と規模、構造などの基礎



第12図 調査作業風景（西から）



第13図 現地説明会風景（東から）



第14図 恵解山古墳の調査区配置図 (1/1000)

資料を得る目的で、数年かけて発掘調査を実施することになった。

今回の調査は、その初年度目にあたり、調査名は恵解山古墳の調査次数を通算して第4次調査としたが、調査対象地が長岡京跡の右京八条一坊十四町にもあたるため、右京第783次調査という長岡京跡の調査次数も併用した。調査は、まず2003（平成15）年8月11日より調査対象地内に繁茂する孟宗竹や雑草などの伐採に着手し、8月21日から第2調査区、翌22日からは第1調査区を重機で掘削して遺構検出のための精査を始めた。開始後ただちに、両調査区において前方部前端に施された葺石を相次いで検出したため、調査区を部分的に拡張するなどして、葺石を中心とする調査をさらに進めた。また、周壕の調査では、予想外に浅いことが判明し、その堆積層中から長岡京期や中世の遺物が出土するなどの成果が得られた。これらの成果を公表するため、10月4日に現地説明会を開催したところ、150名前後の参加者を得た。その後、両調査区でそれぞれ葺石の写真測量をはじめ、写真撮影や実測、葺石の分析など各種の作業を進め、それらが完了した11月5日から埋め戻しを開始した。そして、リース資材などを返却して、11月10日に現地での全日程を終了した。

3 検出遺構

（1）調査区の設定

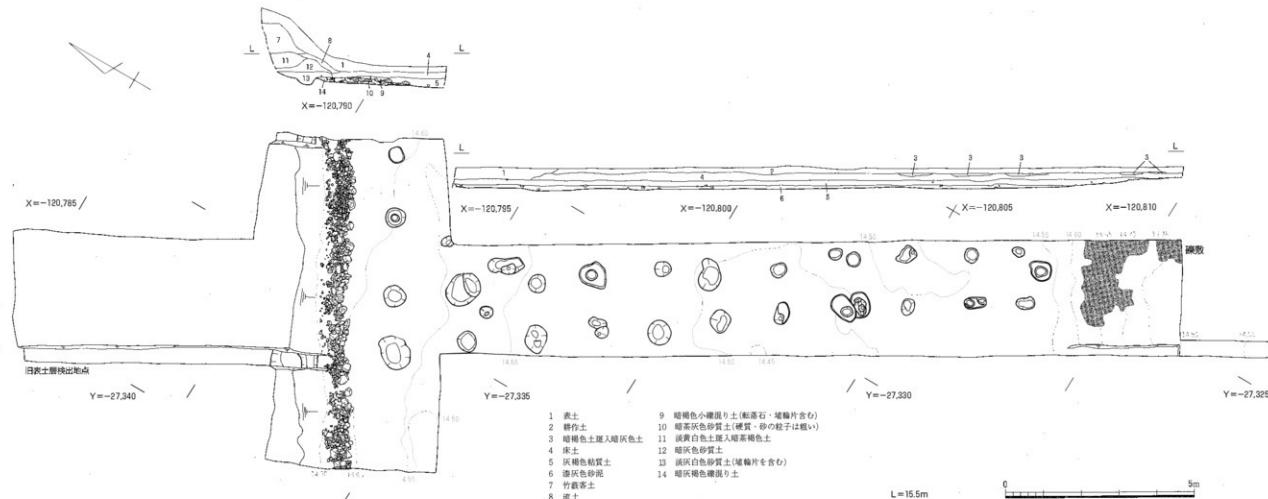
恵解山古墳の墳丘は、墳丘測量図（第14図）をみても明らかなように、墓地の造成や竹藪の開墾などによって大きく改変を受けており、本来の形態をとどめている個所が乏しいことは充分に予測された。特に前方部は、後円部に比べて改変の度合いが顕著で、しかも調査による情報量も乏しい現状であった。このため、今回の発掘調査にあたっては、東南面する前方部の形態と規模の解明を主眼とし、前方部の中央部と東側に2個所の調査区を設定することにした。以下、各調査区の調査所見を述べたい。

（2）第1調査区の所見

前方部前面の墳端、および周壕の規模や構造などの解明を目的とした調査区である。竹藪に覆われた墳丘から南側の水田にかけて、墳丘の主軸にはば沿うように細長く設定した。当初、長さ約31m、幅約3mの規模で設定したが、葺石を追究するために調査区を部分的に拡張した結果、調査面積は122m²になった。調査区中心の国土座標値は、X = -120,799、Y = -27,331である。

墳丘と盛土 古墳の墳丘は、過去の調査によって盛土を積み上げて構築し、傾斜面には葺石を施していることが知られていた。このため、当調査区においても墳丘盛土や葺石、さらにはこれまで未確認であった埴輪列などの検出が期待された。ところが、竹藪に覆われた墳丘は、竹藪の客土や搅乱土が厚く堆積するのみで、古墳築造時の墳丘面は後世に大きく削平を受けてほとんど残存していないことが判明した。ただし、基底部付近の葺石とその背後に施された盛土、さらには古墳築造時の旧表土層と考えられる土層を確認できたことは大きな成果であった。

盛土は、墳丘端部の形成にあたり斜めに削り出された地山の前面（南東側）に施されていたもので、残存する範囲は少なかった。地山は、淡黄白色系の砂質土ないしは砂礫層で、盛土には暗



第15図 第1調査区検出遺構図 (1/100)

灰褐色系の粘質土を使用していた。旧表土層とみられる黒色～黒褐色系の土層は、断ち割りの結果、調査区北端の地表下約1.3mで検出した。淡茶褐色砂質土の地山上に堆積しており、厚さは約0.4mほどあるが、細かくみると4層に細分することができた。各層は厚さが約10cmほどで、いずれも水平に堆積しており、上面での標高は16.1～16.3m前後ある。こうした黒色～黒褐色系の土層は、長法寺七ツ塚古墳群や今里大塚古墳においても確認されており、それらの古墳では細かい単位で盛土としても使用されていることが明らかにされている。なお、埴輪列は確認されなかった。

葺石 蓐石の検出にあたっては、上方の傾斜面から転落した大小様々な石材が広範囲に堆積しており、原位置をとどめる葺石との区別に苦慮したが、前方部前面の裾部に施された基底石とその上約0.7mまでの葺石を確認した。葺石は、崩壊が進行していることもあって、遺存状態は必ずしも良好とはいえないが、おおむね原位置に近い状況を呈しているものと判断した。転落石は、人頭大から拳大のもの他、さらに小さい5cm大ほどの小礫も比較的多く認められ、埴輪片が混在していた。

葺石は、東西に約8.7m分を確認できたが、特に調査区の中央部分は滑落のために不明瞭となっていた。基底石は、長さ20～40cmほどの扁平な石材をおもに横方向にして据え置いているようである。基底石下端の標高は、おおむね14.7m前後であって、ほぼ水平に揃っているといえる。基底石より上位の葺石については、拳大の石材を主体として用いており、墳丘斜面に対し差し込むようにして葺かれていた。裏込めは用いていない。葺石の石材種は、チャートと砂岩が主体で、次いで頁岩～粘板岩が多く、他に緑色岩類、脈石英、花崗岩質アブライトなどが少量あり、それらの多くは古墳の南西約900mを流れる小泉川の河床疊を使用しているものと推察されている。

葺石面の傾斜角度は20°前後であるが、残存状態が良くないため、このままの角度で上方に立ち上がるか否かは明確にできなかった。

周塙 古墳の周間に盾形の地割りが残ることから、かねてより盾形周塙の存在が推定されていた。調査の結果、底部での幅は約18.5mほどあるが、深さは0.3m前後しかない窪地といった程度の浅いものであることが判明した。したがって、これを周塙と判断するのに躊躇するが、後述するように外周部が緩やかに立ち上がって周囲よりも低くなっていること、外周部の斜面上に小礫を敷き詰めていることなど、人為的に掘り窪めて整備していることは明らかである。したがって、ここではとりあえず墳丘の葺石と外周部斜面との間に形成された窪地を周塙と呼称しておきたい。

周塙は、地山を削り出して構築されており、底部はおおむね平坦であって、最深部での標高は14.45m前後ある。周塙内には、灰褐色粘質土、漆灰色砂泥、淡茶灰色粘質土の3層が堆積していたが、そのうち淡茶灰色粘質土は底部上で部分的に薄く堆積する土層であった。また、灰褐色粘質土と漆灰色砂泥には、埴輪片の他に、長岡京期の土師器・須恵器・瓦類・中世の瓦器・須恵器・白磁、それに獸骨や獸齒などの遺物を包含しており、漆灰色砂泥の上面には人頭大の石材が散在していた。これらの堆積層は、周塙全体に及ぶものではなく、葺石が転落した以降に堆積したものであることを確認できた。

外周部は、調査区南端から北に向かって下降する傾斜面になっているが、傾斜角度は約5°程度ときわめて緩いのが特徴である。この緩斜面上では、小礫を州浜のように敷き詰めた状態で検出された。礫敷きの半分以上は遺存していないが、使用された小礫は径3~4cm大のものが主体で、その中に径10~15cm大のものが所々に散在していた。石材種のほとんどはチャートで、他に砂岩や脈石英などが少数認められた。

ちなみに、周濠の底部において、楕円形や不整形を呈した土坑状の浅い窪みを31基ほど確認した。これらの遺構は、径0.9~0.3m、深さ0.05~0.2mほどの規模で、掘り鉢状に掘り窪められていた。あたかも並んでいるかの様相で、さらに調査区外の東西に広がっている可能性が濃厚である。また、出土遺物はきわめて乏しく、土師器の細片と木片を出土するものが少数ある程度で、現状ではその時期や性格について不明といわざるを得ない。

(3) 第2調査区の所見

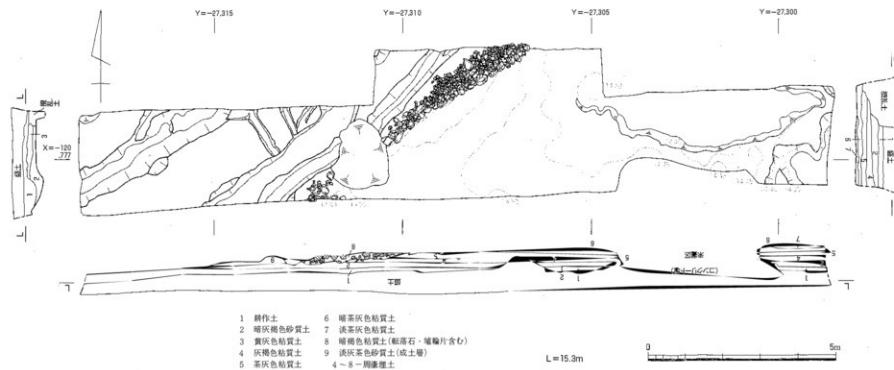
現存する前方部墳丘の南東隅より東側の造成地に設定した調査区で、前方部の前面ないしは東側面の裾部を確認することを目的とした。長さ約20m、幅約3mの規模で設定したが、ここでも葺石を追究するため部分的に調査区を拡張した。調査区心の国土座標値は、X = -120,776.5、Y = -27,308.5、調査面積は57m²である。

墳丘と盛土 墳丘の大半は、第1調査区の場合と同様に地山面まで大きく削平を受けていたが、後述する葺石の背後に施された盛土を確認することができた。

盛土は、墳丘端部の形成にあたって斜めに削り出された地山の前面（南東側）に施されており、平面的にみると西から東に向かって徐々に幅を増す傾向が認められるとともに、調査区の北東部で屈曲して北側に延びる状況を確認できた。このように盛土が屈曲する状況は、前方部前面と東側面との接点の様相を示唆している、つまり前方部の南東隅に近い可能性を想定することができるであろう。盛土の堆積状況をみると、黒褐色～黒色系の粘質土とそれを混じえた黄灰色系の砂質土が交互に薄く積み重ねられており、第1調査区での様相とは大きく異なる。なお、埴輪列は確認されなかった。

葺石 この調査区においても、前方部前面の裾部に施された葺石を確認することができ、これまで復元してきた前方部幅がさらに大きく増大することが明らかとなった。ここでも、転落した石材がかなり広範囲に堆積していたが、基底石とその上に幅約0.8m、高さにして約0.25mほど残存していた葺石を確認できた。葺石の遺存状態は、擾乱坑によって破壊された個所があったものの、第1調査区に比べて良好であった。また、転落石のほとんどは、人頭大から拳大のもので、第1調査区でみられたような5cm大ほどの小礫はほとんどなく、チャート、砂岩、頁岩～粘板岩の他に、結晶片岩が1点出土していることは注目に値する。

葺石は、東西に約8.2m分を確認した。基底石は、長さ20~40cmほどの石材をおもに横方向に使用して据え付けていた。基底石が示すラインは、厳密には一直線とはならず、波状のように若干の出入りがあるようにみうけられた。基底石下端の標高は、調査区の東部で14.5mとなり、第1調査区に比べて0.2m程度低く、水平になっていないことが知られる。これは、地形の傾斜に沿っ



たものと考えられ、埴丘の基底部は地形に左右されていた可能性を指摘できる。

一方、基底石より上位の葺石については、拳大ほどの石材を多用しており、埴丘面に対して長軸を斜めにして盛土内に差し込むよう堅固に葺かれていた。裏込めは存在しない。また、基底石と同程度の大きさの石材が基底石とほぼ直交するように並ぶ石列を2個所で確認できた。この石列は、葺石を葺く際の作業単位を示す区画石列ではないかと考えられ、列石の間隔は約1.7mほどであった。

葺石面の傾斜角度は、15°前後と第1調査区よりもさらに緩やかであった。

周 墓 この調査区では、後世に搅乱を受けた個所があったとはいえ、基底石から南東に向かって緩やかに傾斜する周塙の痕跡を確認できた。調査区東端での標高は14.3m前後であって、第1調査区に比べると約0.2mほど低くなっていたが、これは基底石の場合と同様に地形の傾斜に符合するものと考えられる。周塙内の埋土は、上から灰褐色粘質土、茶灰色粘質土、暗茶灰色粘質土、淡茶灰色粘質土の4層で、埋土の様相は第1調査区と異なるが、埴輪片をはじめ、土師器、須恵器、瓦器など長岡京期と中世の遺物を包含していたことは同じである。

なお、この調査区では、第1調査区でみられたような土坑状の浅い窪みを確認することはできなかった。

4 出 土 遺 物

(1) 古墳に伴う遺物

埴輪とこの地域には産出しない結晶片岩がある。これら大半は、葺石の転落石中に混在した状態で出土したもので、他に周塙からの出土品も少量ある。

埴輪は、整理箱に4箱程度出土している。その大半は円筒埴輪であるが、他に朝顔形埴輪と蓋形埴輪を確認できた。すべて破片であって、全形が分かるものは皆無である。表面の磨滅が顕著で、調整技法のわかるものはきわめて乏しいが、外面調整はタテハケとヨコハケ、内面はヨコハケがみられる。色調は、赤褐色、淡黄褐色、淡灰褐色などを呈した黒斑を有するものばかりで、窯焼成による無黒斑のものはない。

結晶片岩は、いわゆる三波川帯で産出する搬入品で、第1調査区では周塙内から、第2調査区では転落石中からそれぞれ1点づつ出土している。そのうち前者は、長さ28cm、最大幅20cm、厚さ3cmの台形を呈する大型品である。結晶片岩は、これまで第2・3次調査でも出土しており、後円部の埋葬施設である竪穴式石室の壁体に使用された可能性が指摘されているが、前方部では初めての出土である。

(2) その他の遺物

両調査区の周塙内に堆積した土層から、整理箱に1箱程度の長岡京期と中世の遺物が出土している。

長岡京期に属する遺物としては、土師器の皿B、須恵器の杯B・杯B蓋・壺G・甕、平瓦・丸瓦、それに土錐などがある。

中世の遺物としては、土師器の小皿、瓦器の椀・羽釜、須恵器のねり鉢、白磁の皿、それに獸骨・獸齒などがある。瓦器椀は、高台が断面三角形の低いもので、13世紀末から14世紀初頭の時期に比定することができる。

5 ま と め

今回の第4次調査では、惠解山古墳の前方部に関わるいくつかの情報を得ることができた。しかしながら、調査の地点が限定されていたこともあって、不明確、不確定な要素も少なくない。今後も調査が予定されているため、ここでは急いで結論を出すことはせず、現時点での成果を概括するにとどめておきたい。

まず第一の成果としては、前方部前面の裾部に施された葺石を確認でき、前方部の形態と規模を復元するまでの手がかりを得たことである。葺石の遺存状況は、必ずしも良好でなかったが、基底石を確認したことによって、前方部先端の位置を確定することができた。また、前方部南東隅の確認までには至らなかったが、前方部幅がこれまでの復元値（約55m）よりもさらに大きくなることが確実視され、70m程度に達する可能性が推察される。

第二に、墳丘の遺存状態は不良であったが、わずかに残る盛土と古墳築造時の旧表土と考えられる土層を確認できたことである。旧表土層と基底石との比高を勘案すると、旧地形を約1.5m前後斜めに削り出して墳丘の裾部を成形し、その傾斜面上や上方に盛土を積み重ねて構築しているようである。そして、第3次調査での成果を考慮すると、墳丘の盛土厚は5.7m以上にも及ぶことが推察できる。

第三は、周濠は幅が広いのに対して深さが極めて浅いこと、また底部は水平とはならず西から東に向かって緩やかに傾斜していることなどが明らかになった。したがって、古墳築造当初から水を溜めるような構造ではなかったと考えるべきであろう。

注) 山本輝雄他「惠解山古墳第3次調査概要」『長岡京市報告書』第8冊 1981年

第4章 長岡京跡右京第789次調査（7ANKSC-8地区）調査概要

一長岡京跡右京六条三坊一町、開田城ノ内遺跡、開田城跡一

1 はじめに

- 1 本報告は、2003年10月1日から2003年11月5日まで、京都府長岡京市天神一丁目313-1、313-4において実施した長岡京跡右京第789次調査に関するものである。調査は東西方向と南北方向2つの調査トレンチを「T」字形に設定した。総調査面積は163m²である。
- 2 本調査は、長岡京跡および鎌倉時代を中心とする開田城ノ内遺跡、室町時代から桃山時代にかけての開田城跡に関係する考古学的な資料を得ることを目的として実施した。
- 3 発掘調査は、平成15年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は同センター主査の木村泰彦が担当した。
- 4 調査の実施にあたっては、土地所有者をはじめ、近隣地域の方々に種々のご協力とご理解を賜った。
- 5 本報告の執筆・編集は木村泰彦が行った。



第17図 発掘調査地位置図(1/5000)

2 調査経過

今回の調査地は、主に中世開田城に関してのデータを得ることを主たる目的として実施したものである。開田城は、『大乗院寺社雜事記』に、文明二（1470）年「東軍の山名は豊が、西軍の畠山義就が占拠していた開田城や勝龍寺城に攻撃を行った」と記されており、おそらく応仁の乱を契機として築かれたと推定される。約40m四方の方形の城で、以前は単柵と見られていたが、その後南東側にも別の施設が付随することが判明した。城は長岡天神駅の西側約50mに位置しており繁華街の中心にあるが、開田城を築城したと考えられている中小路氏の子孫が所有していたこともあり、ほぼ城の全城が残されていた。これまで開田城に関しては4次の調査が行われており部分的ではあるがその様子が明らかとなっている。

^(注2)
第1次調査（長岡京跡右京第17次調査） 1978年に開田城内にスポーツ・文化施設の建設が計画された。そこで当時中山修一先生が設立された長岡京跡発掘調査研究所が発掘を行うこととなり、開田城に初めて調査のメスが入れられた。調査は開田城の北東隅の土塁内側と南側堀の一部について行われ、その結果南側の堀の規模が幅約9m、深さ約1.2~2.3mであることが判明した。また北東部では土塁内側に沿って並ぶ柵列と見られる柱列が確認された。

^(注3)
第2次調査（長岡京跡右京第67・71次調査） 1981年に城内に商業施設が建設されることから行われたもので、北側に残る土塁部分と南側堀の西部、そして城内の北西部が対象となった。その結果、北側の土塁は基礎部分が6.2m、現存高1.7mであることが判明。断ち割りの結果から、土塁は堀側である北部に基礎となる土を積み上げ、その後城内側に粘質土と砂礫混り土を交互に積み上げるという工程を繰り返していることも明らかとなった。また土塁の内側堀には幅1.7mの排水溝が掘られていることも判明した。さらに土塁の下には旧表土があり、下層からは鎌倉時代の遺構が検出されたことによって、開田城の築城がそれ以降であることが推定されるに至った。南側の堀に関しては、堀が西側には伸びずに途中で途切れており、南側に折れ曲がっていることが判明した。このことから南西部に開田城の門あるいは虎口が存在すると推定された。また城内の調査では土坑、柱穴、井戸、溝などが検出されている。これらは弥生、平安、鎌倉時代のものも含まれている。正式な報告がなされていないため、開田城に関する遺構の詳細は不明である。

^(注4)
第3次調査（長岡京跡右京第520次調査） 1996年に開田城の東に隣接する敷地で行われた調査で、既存建物の基礎によりかなり削平を受けていたが、東側堀の東肩および北側の堀の南肩の一部が検出された。開田城の北側の堀は、現在も東西に流れる西小路川を利用したもので、検出された堀の肩はその旧流路と見られる。東側の堀の深さは約15m、下場から推定される幅は3m以上で、底部にはかなり凹凸が見られた。非常に湧水が激しく、当時もこの湧水を利用していた可能性が考えられた。さらに開田城東辺中央付近では、東側の堀に直角に取り付く東西方向の堀が見つかっている。この堀はこれまでまったく痕跡すら確認されていなかったもので、幅約5m、深さは15mで、東側の堀と同様に内部に凹凸が見られる。特に注目されるのは、堀の南側に崩れ落ちた土塁の堆積が確認されたことで、これにより堀の南肩に土塁が築かれていたことが推定

されるに至った。これまで開田城は単柳方形の平城と考えられていたが、少なくとも南東部に何らかの施設が存在することが明らかとなった。

第4次調査（長岡京跡右京第528次調査）^[4] 1996年に開田城の北西に隣接する土地で行われた調査で、部分的にトレンチを拡張して西側堀の確認が行われた。非常に狭い調査区ではあったが、西側堀の西肩の一部が検出されている。ただ調査区の制約もあり、堀の深さや幅などは確認されていない。

今回、開田城第1・2次調査のきっかけとなったスポーツ、商業施設が、2003年にすべて取り壊されて新しく土地利用がなされることとなり、開田城の中でも特に残存状況が良好な西辺部分に関する資料を得る必要が生じた。そこで今回の第5次調査（長岡京跡右京第789次調査）では、これまで不明であった西側の土塁と堀の状況を確認するため、これらに直交する形で幅3m、長さ40mの東西トレンチを設定。あわせて城の内外の施設の確認も目的とした。また南西隅に虎口が想定されていることから、西側堀が南側堀のように南西部付近で途切れるのか、あるいはそのまま南に伸びるのかを確認するために、西側堀の上に同じく幅3m、長さ17mの南北トレンチを設定した。その結果「T」字形の調査区となった。

調査は、重機により土塁据の堆積土、堀内の現代埋め立て土、耕作土などを除去し、以下は人力によって掘り下げた。また土塁に関しては、将来的な保存、活用の見地から断ち割りによる確認は行っていない。なお2003年11月1日に現地において調査に関する説明会を行い、多数の人々の参加を得ることができた。また現地にて多く方々から貴重なご意見も賜った。

3 検出遺構

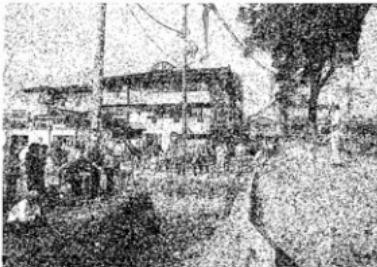
今回の調査地は非常に細長いもので、土塁、堀、開田城の内外にわたっている。そのため、層序も場所によって異なるためまず基本的な層序を地点毎に述べ、次いで時代別に検出された遺構について述べていきたい。

（1）基本層序

堀西部（第21図） 東西トレンチの西半部、開田城の城外にあたる個所である。以前に木造の民家が建てられていたが、調査直前には解体整地されていた。この整地土の下には、建物建設以



第18図 発掘調査風景（南西から）



第19図 現地説明会風景（南から）

前の耕作土・床土があり、これらを除去すると現地表下約0.5mで黄褐色粘質土の地山面となり、この面で遺構が検出された。検出面はほぼ平坦で、標高は24.5mである。開墾時に削平されているものと見られる。検出された遺構には土坑、落ち込み、竪穴住居、ピットなどがある。

西側堀（第21図） 現在は埋め立てられて周囲と同じ高さとなっているが、開田城内に各種施設が建設される以前は窪みとして残されていた。上面は多量のゴミを含んだ埋め立て土が0.8～1mあり、その下に埋め立て前の表土である灰色粘質土（第5層）がある。周辺の方々に伺ったところによると、この部分は常に湿っており、芹などが植えられていたことがあるという。土層観察では、土壌層と堀の落ち込み裾に平行する形で溝が掘られており、耕作が行われた時期のものと見られる。それ以下は堀内の堆積となるが、これに関しては遺構のところで述べる。

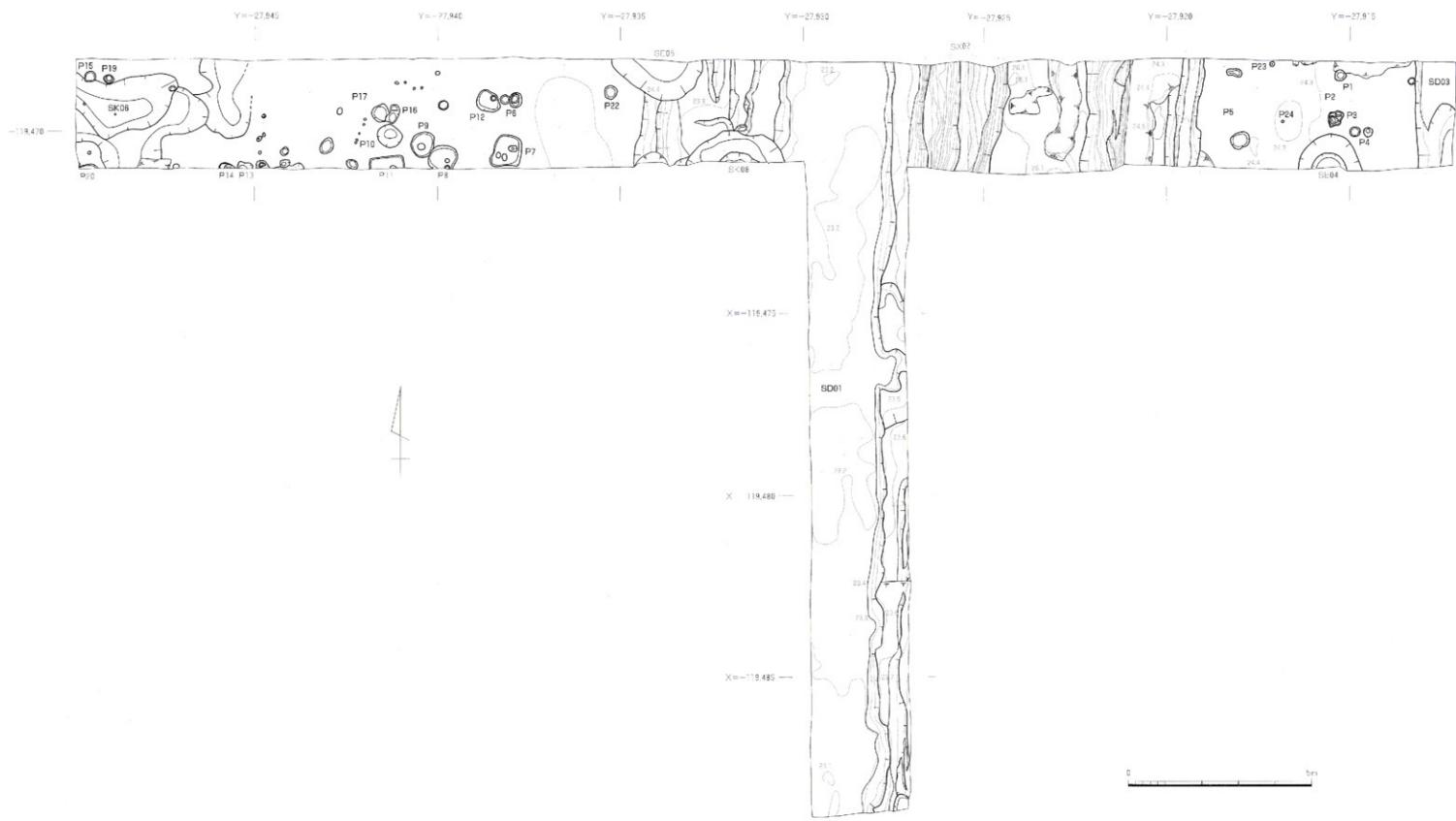
土壌周辺（第21図） 先にも述べているように、断ち割りは行っておらず表面の堆積土を除去したのみである。土壌の上面は、調査直前に樹木の伐採が行われて、その後きれいにならされていたためほとんど堆積土はない。西側斜面では、堀を埋め立てた跡に作られたブロック塀の間に多くのゴミを含んだ堆積層があり、それを除去すると、本来の土壌上の堆積と見られる腐植土（第2層）があり、さらにその下に黄褐色粘質土（第25層）の薄い堆積が存在した。ただ断ち割りを行っていないため土壌本体の構築土との区別が不明瞭な点がある。東側は、以前に土壌の裾を削り込んで民家が建てられていたため、本来の形状は留めていない。ただトレーンチ北壁では、建物基礎の壁面で、旧表土である黒褐色粘質土（第46層）とその上に土壌の構築土と見られる褐色砂質土（第32層）が確認された。

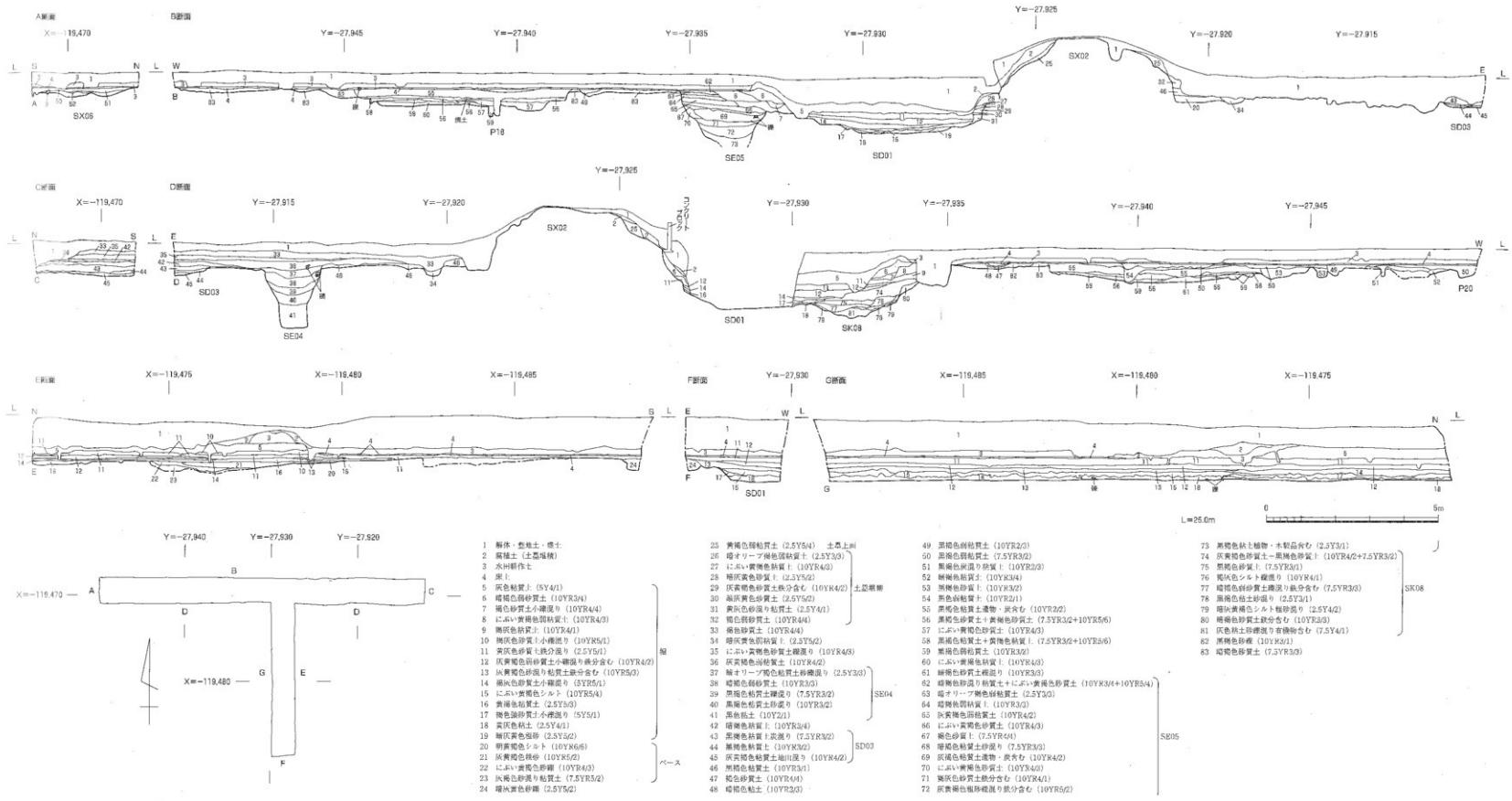
土壌東側（第21図） 東西トレーンチの東部、開田城内に位置する部分である。上面に建物解体、整地上があり、その下に、近世遺物を含む褐色砂質土（第33層）があり、以下にぶい黄褐色疊混り砂質土（第35層）、灰黄褐色粘質土（第36層）があり、それらを除去すると現地表下約0.7mで明黄褐色シルト（第20層）の地山面に至る。また南側には薄く旧表土である黒褐色粘質土（第46層）が残されている。遺構はこの面で検出された。検出面での標高は24.4mで堀の西側に比べると約0.1m低くなっている。検出された遺構には、溝、井戸、ピットがある。

（2）開田城の遺構

西側堀 S D01（第20・21図） 東西トレーンチの中央部で検出された。幅は約8m、検出面からの深さは約1.2mと幅に比してかなり浅いものであった。先述した旧表土より下の堆積は、トレーンチ北側では、黄灰色砂質土（第11層）、疊混りの灰黄褐色砂質土（第12層）が約0.2mの厚さで堆積しており、さらにその下に褐灰色砂質土小疊混り（第14層）、黄褐色粘質土（第16層）、褐色砂質土小疊混り（第17層）、黄灰色粘土（第18層）、暗灰黄色粗砂（第19層）の約0.1m前後の薄い堆積が見られる。このうち第19層は部分的に見られるもので、最下層は基本的に第18層である黄灰色の粘質土である。これは堀内に水が存在していたことを示すものと言えるが、常に水が溜まっていたとするには堆積が非常に薄い。またこの粘土層では、人か動物かは特定できていないものの、水田遺構などで見られる足跡状の凹凸が多数認められた。

堀内部に設定した南北トレーンチでも基本的な層序はほぼ同じであるが、南に行くと部分的には





第21図 調査地土層図 (1/100)

あるが異なる部分が見られる。南北トレンチ中央付近より南は、水田として利用されていたため、北側で見られたような窪みではなく平坦になっている。南北トレンチの東壁の観察では、現在の土壘が途切れている付近に畔の高まりが認められ、その下には堀内部の堆積が認められず、すぐに地山面となっている。このことから現存する土壘は、水田として開墾された段階で基底部以下まで削平を受けていることが明らかとなった。水田耕作土下面の標高は約23.9mで、南北トレンチで確認されている遺構検出面から約0.5~0.6m程低くなっている。また内部の堆積土は、北側に比べ全体に砂、小礫の混り具合が多くなる。

これら以外に、土壘裾部で堀内の埋土と異なる薄い堆積が認められた。これらは非常に堅く締まっており、突き固められたものと見られる。この堆積が本来この位置にあったものか、あるいは上面の土壘が崩れて堆積したものか、部分的に細く断ち割りを入れて確認を行ったが、今回の調査では明らかにできなかった。

堀の形状は、城外側にあたる西肩は非常に緩やかで、さらに標高23.8m付近と23.5m付近に階段状に平坦な部分が見られる。前者は幅約1.4m、後者は約0.6mで、土壘裾にあたる東側にも同じく標高23.5m付近に犬走り状に幅約0.4~0.7mの平坦部が存在し、これは南部まで同様の状況である。特に城の外側にあたる西肩は防御施設としては非常に緩やかであり、階段状の施設があれば容易に堀内に入ることができる。3m幅の部分的な調査のため、西側堀がすべてこのような形状を呈していたかは不明であるが、先述した堀底部に見られた足跡の痕跡と無関係とは思われない。また堀の底部はほぼ平坦で、底部の標高は調査地内の北側で23.2m、南側で23.1mとわずかに南に低くなっている。

土壘S X02（第20・21図） 表面の堆積土を除去した段階で確認された現状での規模は、土壘の東西の遺構検出面を標準にすると、幅5.1m、高さは1.7~18mである。上面には樹木の抜き取り跡や、外灯の基礎による搅乱がある。このうち幅に関しては先にも述べたように東側が民家建設時に削られているため狭くなっている。ここで注目されるのが土壘東側で見つかった南北方向の溝である。この溝は幅約0.6m、深さ0.2~0.4mで、当初は建物基礎の一部と思われたものである。遺物がまったく出土していないため、時期に関しては不明な点があるものの、位置などから北辺の土壘でも確認されている土壘裾に掘られた排水溝の可能性が高いと見られる。この溝を排水溝として土壘規模を復元すると、幅約6.5mとなり、北辺の土壘で確認された幅6.2mとほぼ同規模となる。従って開田城の北辺、西辺の土壘は幅が6.2~6.5m、内側に排水溝を持つ同規模・同形態を有していたものと見られる。なお構築状況に関しては、断ち割りを行っていないことから不明であるが、表面の観察では旧表土上に黒色土と黄色土の色の違いが看取される。また斜面部の土は非常に柔らかく、本来の土壘表面が残されているのか疑問な点がある。先述した堀内部で土壘裾に堆積していた堅い層が、崩れ落ちた本来の表面の可能性も考えられる。

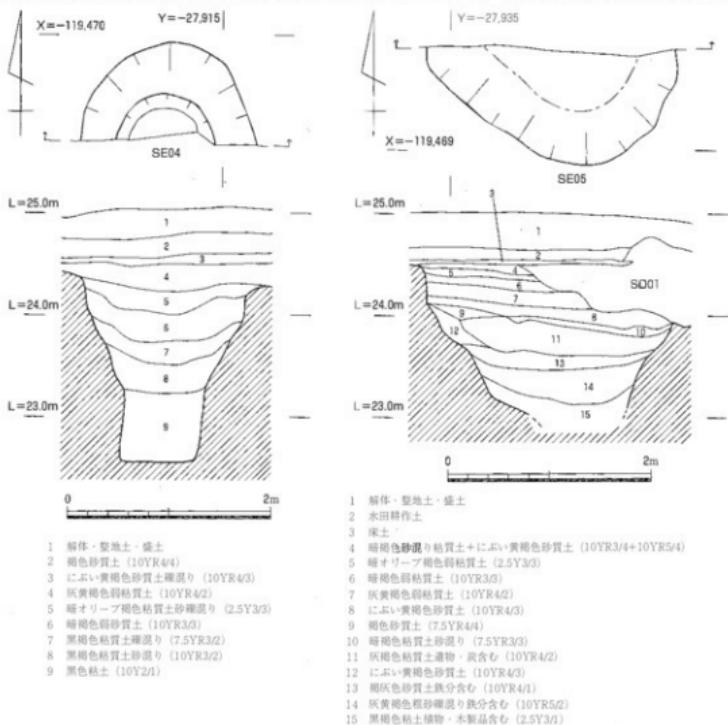
（3）鎌倉時代の遺構

井戸S E04（第22図） 土壘東側の開田城内で検出された円形井戸である。トレンチの南壁にかかるため、北半部のみの調査となった。検出面では直径約1.7mで、検出面から約1mで

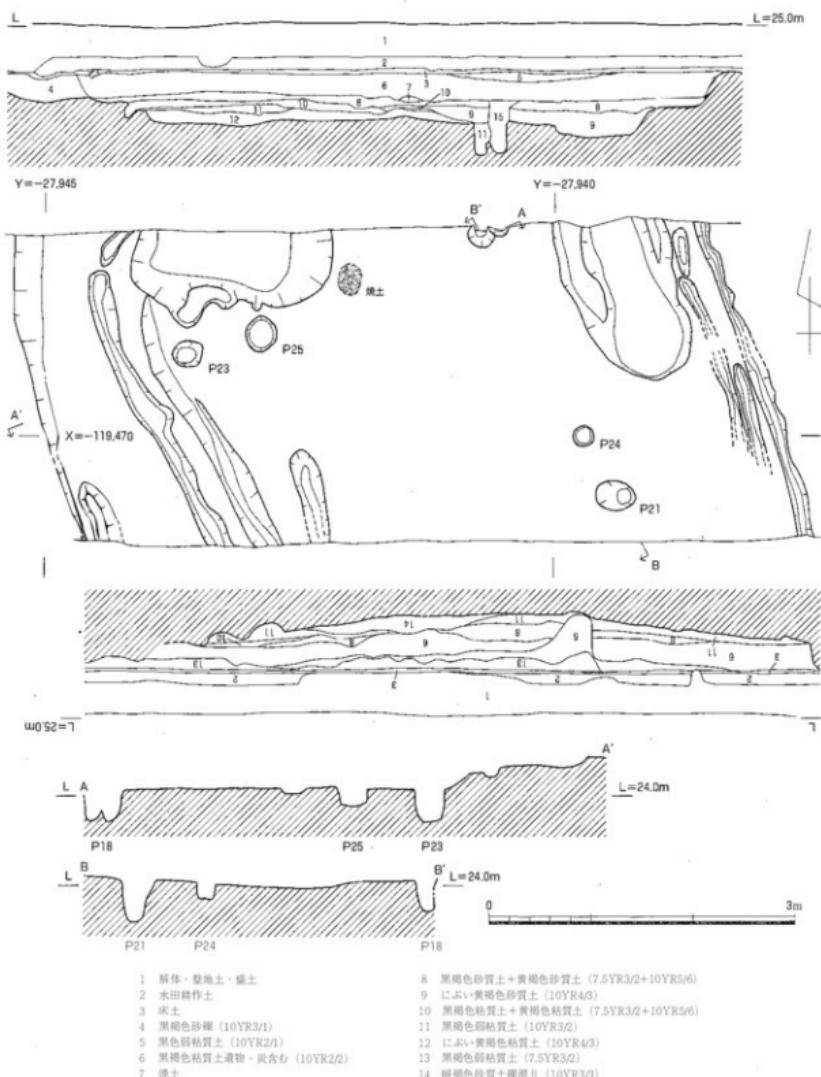
直径0.8mと一回り小さくなり、壁面も垂直となる。深さは1.7mで、底部は平坦である。土層の状況から井戸側が抜き取られたものと見られるが、構造は不明である。上面に直径0.1~0.2m前後の石が混入していたことから、上部が石積で下部が木製の井戸側であった可能性も考えられる。遺物は少量であるが、瓦器碗片、白磁片などが出土している。

井戸 S E 05 (第22図) 開田城西堀の西肩付近で南半部が検出されたもので、東西約2.5m、深さについては、トレント北壁にかかっており、埋土が脆弱で崩壊の危険があることから検出面から約1.5mまでを確認したのみである。この付近では東西約1.3mと狭くなっている。埋土は検出面から約0.5mまでは、0.1m前後の薄い層が均一に堆積し、それ以下は0.2m前後のやや厚い堆積に変わる。上層の薄い堆積は水平ではなく、やや開田城の堀に向かって傾斜しており、自然に埋没したのではなく、開田城の築城時に堀の肩を形成する部分として意識して埋め立てられた可能性が考えられる。遺物は下層に多く、完形の瓦器碗や羽釜などが出土している。

土坑 S K 06 (第20・21図) トレント西辺で検出された不整形な落ち込みで、底部付近では溝状に深くなっている。南北1.7m、東西3.6m以上、深さは0.2~0.4mで南部肩はやや崩れている。内部からは少量の土師器片と、瓦器片が出土していることから、鎌倉時代開田城ノ内遺跡に伴う



第22図 井戸 S E 04・05 実測図 (1/50)



第23図 積穴住居S H 09実測図 (1/50)

ものと見られるが、性格は不明である。

土坑 S K08（第20・21図） 井戸 S E05と同じく開田城西側堀の西肩付近で南半部が検出されたものである。堀によって東側が大きく削平されているが、現状で東西2.7m、断面は擂鉢状に落ち込み、検出面から1.5mで底部が検出された。最下層には有機質を含む粘土層が堆積しており、井戸ないしは湧水を利用した水溜め状の遺構と考えられる。瓦器碗、羽釜、鍋などが出土している。

（4）長岡京期の遺構

溝 S D03（第20・21図） 東西トレーニングの東辺部で検出された溝状の落ち込みである。西肩のみが検出されたため、当初は浅い落ち込みとも見られたが、すぐ北側の開田城第2次調査において溝状遺構が検出されており（第25図）、その延長部にあたることが判明した。深さは0.25mで、幅は開田城第2次調査の成果から約2m前後と推定される。内部から出土した遺物から長岡京期の遺構と判断された。当調査地の南120mで行われた右京第90次調査では長岡京の西二坊大路東西両側溝が検出されており、その内の西側溝 S D39の中心座標はY=-27,911.695というデータが得られている。溝 S D03の幅が先ほどの推定から約2mと仮定すると、中心のY座標はおよそ-27,912付近となり、西側溝 S D39の数値とほぼ近いものとなる。このことから溝 S D03は西二坊大路西側溝と考えられる。

（5）弥生時代の遺構

竪穴住居 S H09（第23図） 東西トレーニングの西半部で検出された平面隅円方形を呈する住居である。弥生時代後期のもので、2度の建て替えが認められ、東辺部を中心にして徐々に大きく、浅くなっている。全体に北で西へ30度前後の傾きを持つ。上面にピット群が存在し、埋土も区別が困難であったため、調査中は明確に時期差を認識できず、主に断面等から確認した部分が多い。最終段階のものは最も規模が大きく、東西が約6.7m、南北は調査地外に広がるため不明である。深さは約0.25mで、周囲には周壁溝が存在し、西辺は不明瞭であるが、東辺部は遺存状態が良好である。底部には張り床と見られる堆積（第8層）が認められる。また中央や北西よりの個所には焼土層の広がりが認められた。これ以前の住居は東西が約5.5mで、同じく床面に張り床と見られる堆積（第10層）が見られる。この段階では東辺部に沿って東西1m、南北1.6m以上、深さ0.25mの平面橿円形を呈する貯蔵穴が設けられている。内部の遺物は少なく、甕の底部片などが出土している。最初の住居は最も小さく東西が約5mで、張り床は確認できない。この段階では北西隅に東西2m、南北0.7m以上の貯蔵穴が見られるが、遺物はまったく出土していない。主柱穴はどれがどの時期に伴うものか明確ではないが、北壁断面から確認できるものでは、最初のものと最終段階のものが確認される。北西部と南東部にも2基づつの柱穴が存在しており、対応関係にある可能性が高いが、先述の如く面上に捉えられていないため不明な点が多い。埋土内の遺物は非常に少なく、上面のピット群から出土したものもあわせて弥生時代後期と判断した。

（6）その他の遺構

調査地全体では開田城の城外にあたる南北トレーニング西部と城内にあたる東部から柱穴が検出されている。いずれも遺物がほとんどなく、あっても小片であり、土師器片以外では瓦器の出土を

規準に時期を判断せざるを得ない。東部では4基の柱穴を持つピットが見つかっているがいずれも瓦器椀片を含み、また建物としてのまとまりも認められなかった。おそらく開田城に伴うものではなくそれ以前の開田城ノ内遺跡のものと思われる。

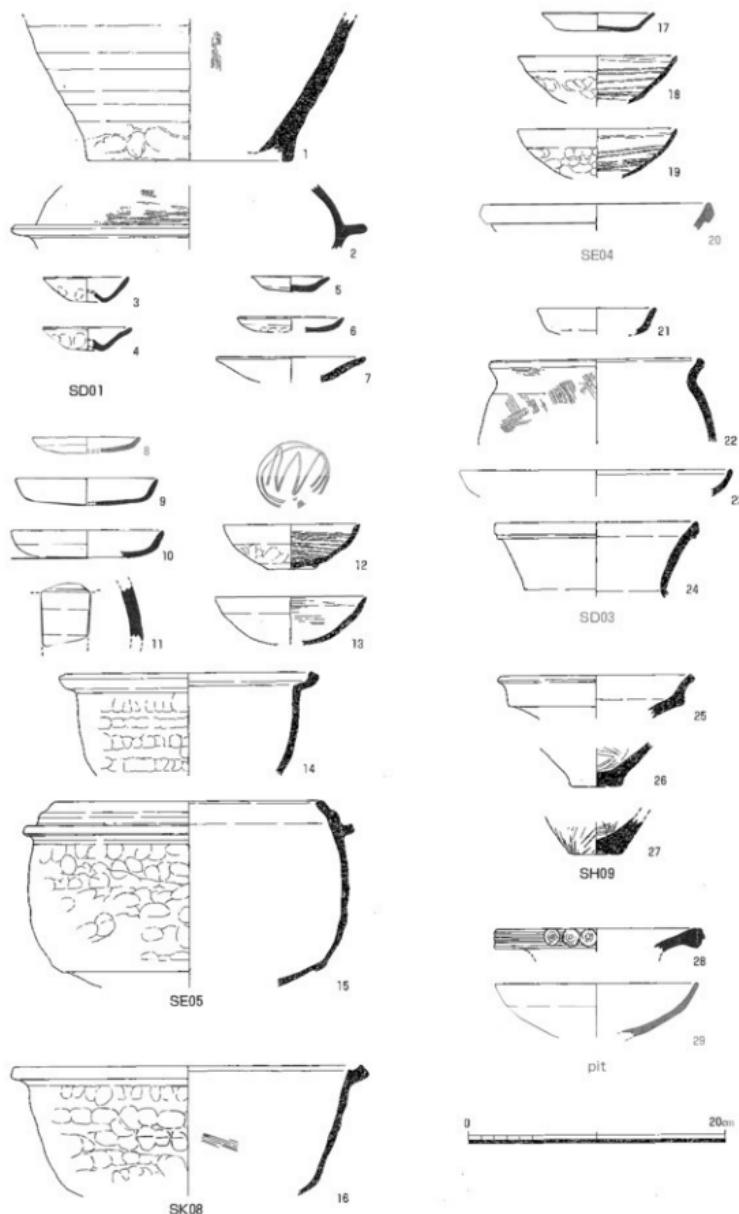
西部でもピットは建物としては明確に認識できず、また開田城に伴うと思われる施設も確認できなかった。このうちトレンチの南辺部で平面が隅円方形ないし不整形を呈する大形のピットが3基並び、これらは古い時期の建物の可能性がある。東西方向の柱筋は、西で南に約10度振れている。掘形は一辺0.8~0.9m前後で、内部には直径約0.1~0.15mの柱跡が認められ、柱間は西から1.5m、1.8mと不均等である。出土遺物がなく、かつ部分的な検出のため時期や規模などは明らかにはできなかった。

4 出土遺物

今回の調査ではコンテナにして約3箱の遺物が出土している。最も量的に多いのが鎌倉時代の遺物で、開田城ノ内遺跡に関連するものである。主に井戸S E 05に多く、他は開田城の西側堀内のものが大半を占める。西側堀の遺物は、調査面積の割に出土量が少なく、開田城の時期に属するとみられるものは非常に少量であった。他に長岡京の西二坊大路西側溝S D03、弥生時代後期の堅穴住居S H 09出土のものがある。

西側堀S D01出土遺物 1は信楽焼の擂鉢底部片である。内面は非常に磨滅しているが、わずかに縱方向の擂目が確認できる。外面はナデによる調整で、底部外面には指圧痕が残される。胎土は桃白色を呈し、大粒の長石・石英粒を含む。底部径は16.4cmに復元される。2はいわゆる瓦器の茶釜で、鍔と肩部のみが残る。鍔は貼り付けにより、端部は丸く納めている。鍔と内面はナデによる調整、肩部は横方向のヘラミガキを施している。残存する破片では、耳の痕跡は確認できなかった。鍔の直径は28.0cm。鍔部以下の外面には煤が付着している。3・4は底分中央を押し上げたいわゆるへそ皿である。3は口径6.8cm、器高1.95cm、4は口径7.0cm、器高1.8cmを測る。いずれも内面と口縁部外面をナデ調整し、底部は不調製で指圧痕が残る。淡橙色を呈し、石英・赤色粒子を含んでいる。5は口径6.2cm、器高1.2cmの小さな皿で、口縁部はナデにより外反気味となる。外面は不調製。黒灰褐色の胎土で、砂粒と金雲母を含む。6は口径8.4cm、器高1.1cmで、口縁のナデは狭く、端部はやや内彎気味となる。7は大きく開く口縁を持つもので、口縁部内外面ヨコナデ。口径11.8cm、器高1.9cmに復元されるが、小片のため、復元にはやや難がある。5と同じく黒灰褐色の胎土を持ち、砂粒と金雲母を含んでいる。このほかに図示できないが青磁碗の小片が出土している。

井戸S E 05出土遺物 8~10は土師器の皿で、8は口径8.4cm、器高1.2cmの小形のもの。9・10は口径11.2~12.2cm、器高2.0cmで、口縁部のナデは弱く、比較的薄手に作られている。淡黄白色で、赤色粒、金雲母を含んでいる。12・13は瓦器椀である。このうち12はほぼ完形のもので、口径10.7cm、器高は平均で3.5cmである。内彎する体部を持ち、口縁端部は細くなっている。外面は口縁部はヨコナデ、それ以下は不調整で指圧痕が残る。内面には粗いヘラミガキを施



第24図 出土遺物実測図 (1/4)

し、見込みにも粗く鋸歯状にミガキを入れている。底部には直径約4cmの断面が三角形を呈する高台を貼り付けている。13は破片で、口縁端部はナデによって凹む。口径11.8cmに復元される。14は瓦質の鍋である。口縁端部の屈曲は大きく、端部は断面方形を呈している。口径は20.4cm。体部の内外面には指圧痕が残り、外面には煤が付着する。15は羽釜で、短く内擣する口縁部と、丸味を帯びた体部からなり、底部には型作りの圧痕が見られる。鍔は口径断面方形を呈する短いもので、外面には指圧痕がのこり、煤が付着している。口径21cm、鍔径約26cmである。

11は井戸内に混入していた長岡京期～平安時代の綠釉单彩陶器である。器形はいわゆる火舎で、縱に細長く開けられた長方形の透かし孔付近の破片である。透かし孔の上端部には沈線があり、外面のみに施釉される。釉は淡緑色、胎土は精良で黄白色を呈し、石英粒と金雲母が含まれる。

井戸 S E 04出土遺物 17は土師器皿で、口径8.8cm、器高1.5cmである。外面は剥離のため調整は不明であるがヨコナデにより口縁部は外反する。淡橙色を呈し赤色粒、金雲母を含む。18・19は瓦器碗で、歪みがあるため正確さには欠けるが、口径12.4cmに復元される。外面は口縁部はヨコナデ、それ以下は不調整で指圧痕が残る。内面には粗い横方向のヘラミガキを施す。20は白磁碗の口縁部片で、口径は17.8cmである。

土坑 S K 08出土遺物 図示できたのは瓦質の鍋（16）のみである。口縁部の屈曲は小さく、端部は外上方に短く張り出す。体部内面にはわずかに横方向のハケメが残り、外面は指圧痕が明瞭に残されている。口径27.2cm。

溝 S D 03出土遺物 いずれも細片が多く、口径の復元などやや難がある。21は小形の皿Cで、口径8.6cm、器高1.4cm。内面及び口縁部のみをヨコナデするe手法である。23は皿Aの口縁部片で、端部はわずかに肥厚する。口径21.4cmに復元される。不明瞭であるが外面全体をヘラケズリするc手法である。22は甕の口縁部片である。屈曲する口縁部と球形の体部からなるいわゆる都城型の甕で、口縁端部は内上方にわずかに突出する。口縁部はヨコハケの後ヨコナデ、体部外面には不定方向に細かいハケメが残る。長岡京期よりやや新しい時期の可能性がある。24は古墳時代の須恵器広口壺の口縁部片である。口径15.6cmに復元される。

竪穴住居 S H 09出土遺物 25・26はいざれも北側壁面から出土したものである。25は高杯の口縁部片と見られる小片であるが、復元される口径は154cmと小さくなる。口縁部は大きく外反し、端部は平坦面をなす。26は甕の底部片で、底部径4.2cm。やや突出気味で、内面に放射状にハケメが残されている。27は東辺貯蔵穴出土の甕底部片である。内面にはハケメが、外面には平行叩きの跡が残されている。底部径は4.1cmである。

その他の遺物 28・29は竪穴住居S H 09上面で検出されたピットから出土した遺物である。28は壺の口縁部片で、端部を拡張させて平坦面を作り、平行する3～4条の沈線を施した後、3個一組の竹管文を入れた円形の浮文を貼り付けている。内面は剥離しており調整不明であるが、外面にはヨコナデが看取される。口径16cmに復元される。29は高杯の杯部片である。内擣しながら大きく広がり、端部は丸く仕上げる。内面にはわずかにハケメの痕跡が残されている。口径15.8cmである。

5　まとめ

今回の調査では、当初の目的通り開田城の西側の土壘と堀の状況をある程度明らかにすることできた。まず土壘に関しては、北辺で確認されたものとはほぼ同一規模であること、そして土壘内側の裾には排水溝を持つことなどが明らかとなった。また断面の観察結果から、現在残されている土壘の南側が、水田の開墾によって完全に削平されていることも明らかとなった。従って以前より指摘されていた、南西の虎口の存在に関しては、土壘の状態からは確認することはできなかった。また西側の堀は少なくとも調査地ではそのまま南にまっすぐ伸びており、南辺堀で確認されたように、堀が途切れたり折れ曲がるような状況は見られなかった。

堀の形状は、検出遺構でも述べたように傾斜が緩やかで段があり、容易に中にはいることができるため、防御の面から見るとやや不備な感は免れない。特に東辺で確認された堀がかなり急な角度を有していたことからもその差は際だつ。これに関しては、この時期の城の堀が単に防御の側面だけでなく周辺の灌漑用水としても利用されていたという可能性が考えられよう。実際開田城の北側の堀は西小路川という基幹水路を利用しておらず、この水路を利用して開発が進んだ一帯が「開田」の地名の元になったと考えられる。ちなみにこの西小路川は長岡京の五条大路南側溝をほぼ踏襲して作られており、その開発時期は平安時代に遡る可能性が考えられる。従って開田城は築城当初から用水路に接して作られていたわけである。また堀内の堆積状況から、最下層の粘土堆積層に足跡が確認されている点も灌漑用水としての側面を表すものとも言える。さらに穿った見方をすれば、粘土層の堆積が非常に薄く、堀内に投棄された遺物の量が非常に少ない点も、あるいは常に清掃が行われていた結果と見ることもできよう。ただこれらに関しては今回の調査範囲はあまりに狭く、あくまで推定の域を出るものではない。今後の周辺での調査を待つことをしたい。

また今回の調査にあたって、これまで略図のみが公表されていた開田城第2次調査の平面図を再検討した結果、南側の堀は南西付近で途切れ、さらに直角に南に折れ曲がっていることも明らかとなった（第25図）。第3次調査で確認された東辺に接続する東西方向の堀と合わせ、開田城が単純な方形單櫓の城ではなく、周囲に別の区画を有する可能性がさらに高まった。

開田城は、この時期の城としては市街地内にあってその全容を明瞭に残す全国的にも稀な遺跡である。部分的とはいえ土壘の遺存状況も良好であり、将来的な保存・活用が望まれる。

注1) 山本輝雄「開田城址発掘調査略報」「長岡京ニュース」第14集 1979年

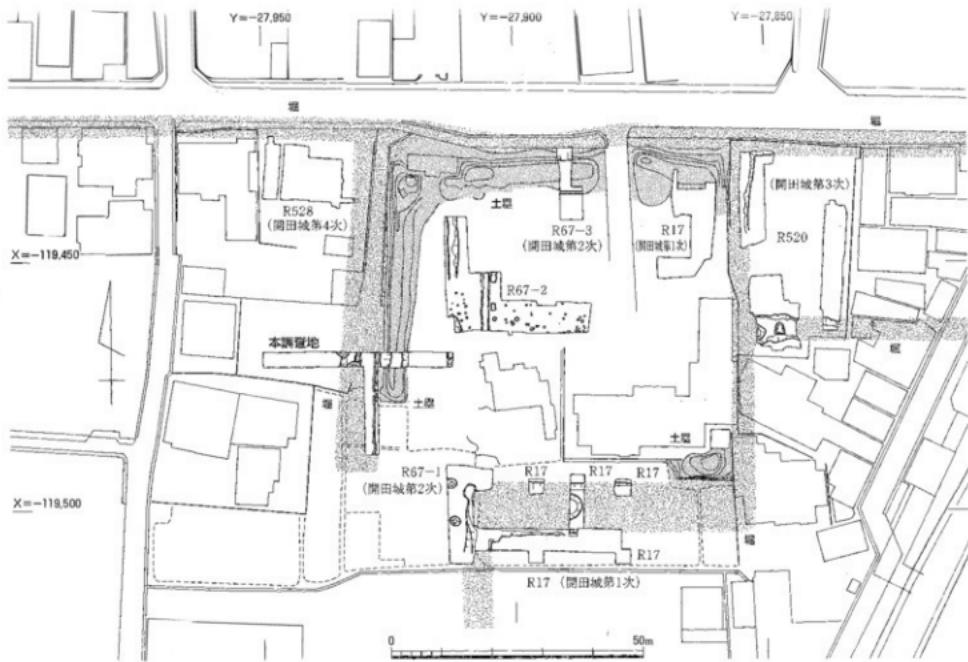
2) 未報告「長岡京跡発掘調査研究所調査」

3) 木村泰彦「右京第520次調査略報」「長岡京市センター年報」平成8年度 1998年

4) 岩崎 誠「長岡京跡右京第528次調査概要」「長岡京市報告書」第36冊 1997年

岩崎 誠「右京第528次調査略報」「長岡京市センター年報」平成8年度 1998年

5) 岩崎 誠「長岡京跡右京第90次調査概要」「長岡京市報告書」第9冊 1982年



第25図 開田城周辺調査位置図(1/1000)

付表-2 報告書抄録

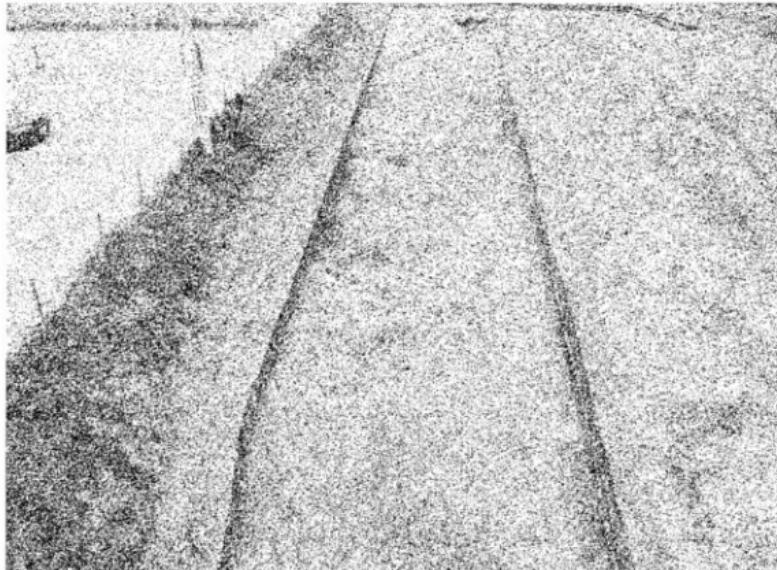
ふりがな	ながおかきょうしぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	長岡京市文化財調査報告書
副書名	
シリーズ名	長岡京市文化財調査報告書
シリーズ番号	第46冊
編著者名	木村泰彦、山本輝雄、中島晋夫
編集機関	財団法人長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617-0853 京都府長岡京市奥海町東条10-1

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京跡 南栗ヶ塚遺跡	長岡京市久貝二丁目 216	26209	107 103	34°54'36"	135°42'4"	20030210 20030318	336 m ²	遺跡確認
長岡京跡 雲宮遺跡 芝本遺跡	長岡京市神足芝本8・9・10	26209	107 88 87	34°55'08"	135°42'31"	20030227 20030331	48 m ²	遺跡確認
長岡京跡 恵解山古墳 南栗ヶ塚遺跡	長岡京市勝竜寺1204・久貝二丁目813・814	26209	107 200 103	34°54'38"	135°42'3"	20030811 20031110	179 m ²	遺跡確認
長岡京跡 開田城跡 開田城ノ内遺跡	長岡京市天神一丁目313-1、313-4	26209	107 74 73	34°55'21"	135°41'39"	20031001 20031105	163 m ²	遺跡確認

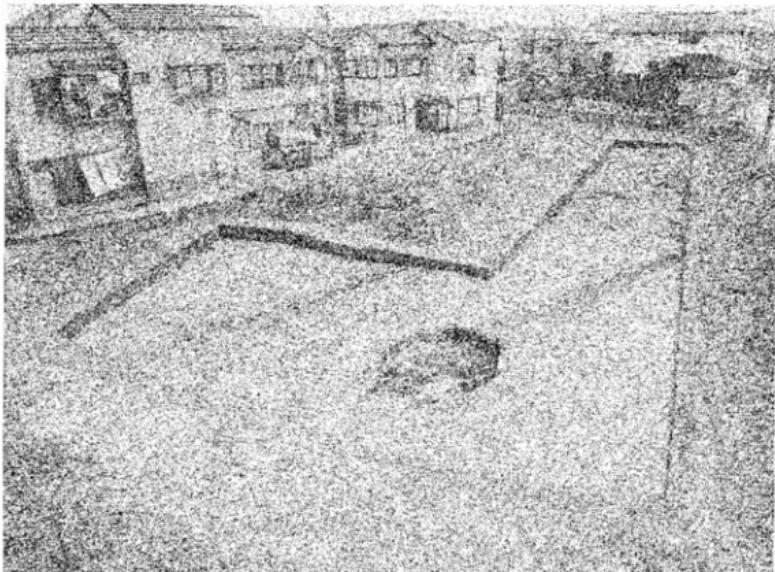
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡(右京第5次) 南栗ヶ塚遺跡	都城 集落	長岡京期 中世		土師器、須恵器	
長岡京跡(左京第3次) 雲宮遺跡 芝本遺跡	都城 集落 集落	長岡京期 中世 绳文	溝	須恵器 土師器・瓦器 土師器	
長岡京跡(右京第783次) 恵解山古墳(第4次) 南栗ヶ塚遺跡	都城 古墳 集落	長岡京期 古墳 中世	葺石、周塗	土師器、須恵器、瓦 埴輪、結晶片岩 瓦器、青磁	
長岡京跡(右京第9次) 開田城跡(第5次) 開田城ノ内遺跡	都城 城館 集落	長岡京期 中世 弥生～古墳	土壘、掘 堅穴住居		

緯度経度の測点は、調査区の中央部である。また、緯度経度の国土座標系は、旧座標系を使用している。

図 版



(1) 調査区全景（南東から）



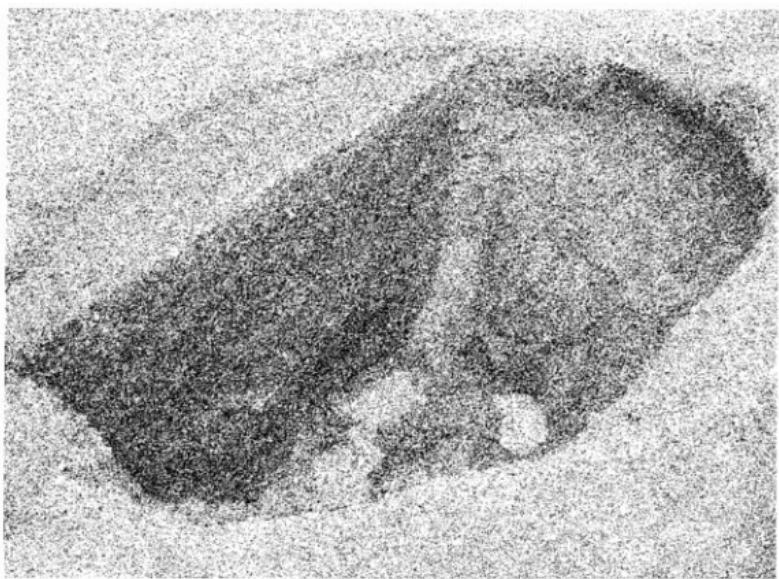
(2) 調査区全景（北西から）

長岡京跡右京第765次調査

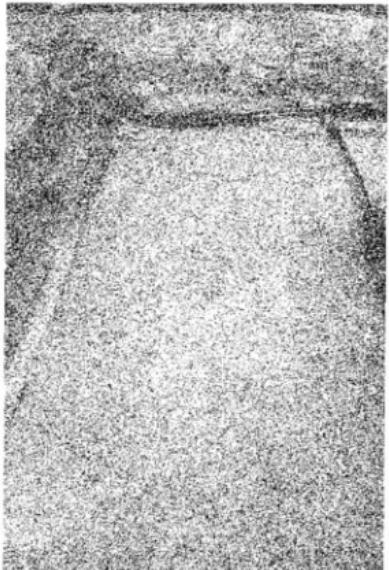
図版二



(1) 調査区土層堆積状況（北西から）



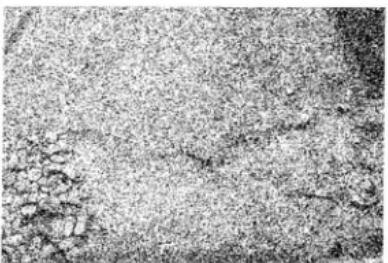
(2) 井戸SE04（北から）



(1) 砧敷遣構検出面全景（南から）



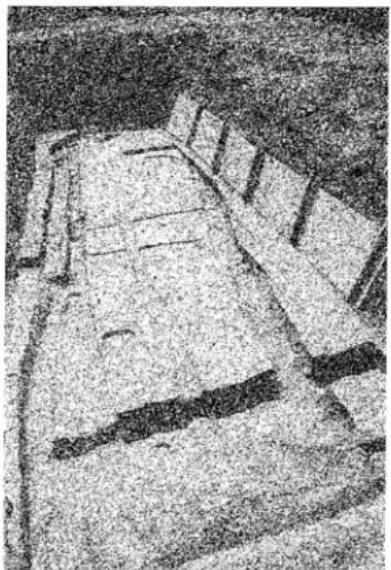
(2) 砧敷遣構検出状況（北から）



(3) 砧敷遣構と流路（北から）



(4) 長岡京期全景（南東から）



(5) 長岡京期全景（北東から）

恵解山古墳第4次・長岡京跡右京第783次調査

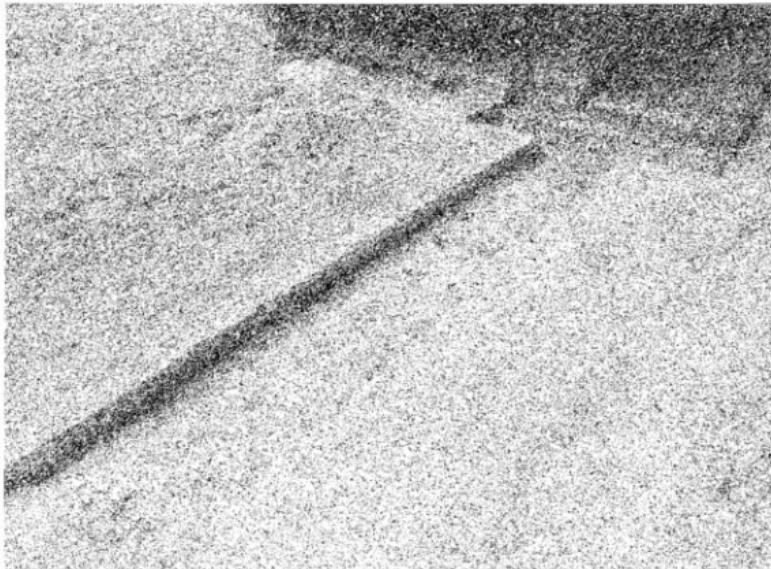
図版四



空から見た恵解山古墳と調査地

恵解山古墳第4次・長岡京跡右京第783次調査

図版五



(1) 第1調査区全景（東から）



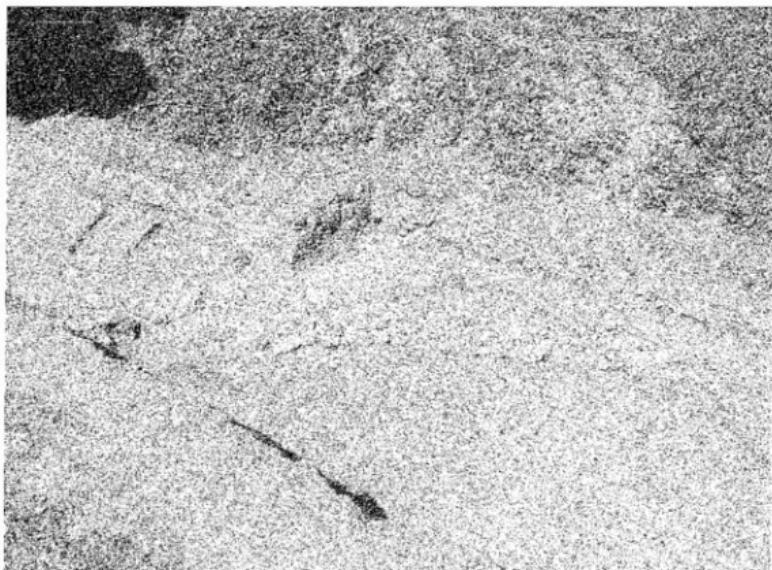
(2) 第1調査区葺石検出状況（南西から）

恵解山古墳第4次・長岡京跡右京第783次調査

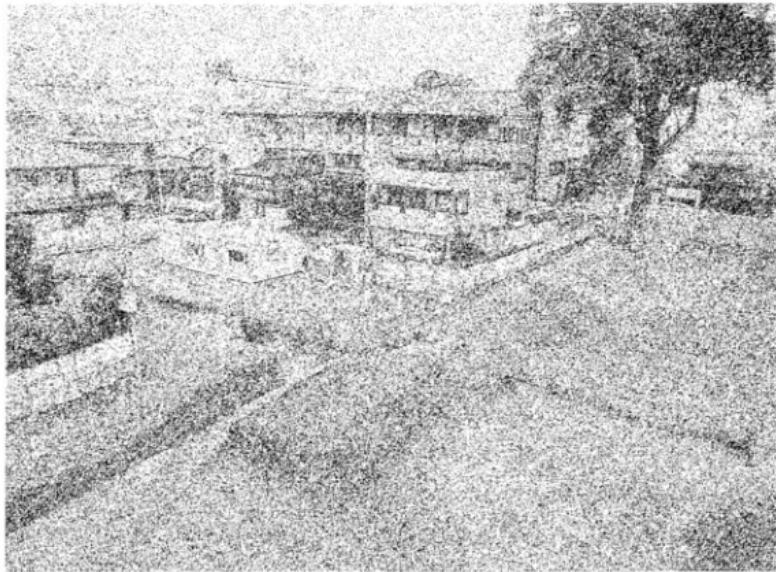
図版六



(1) 第2調査区全景(東から)



(2) 第2調査区葺石検出状況(南東から)



(1) 発掘調査地全景（南東から）



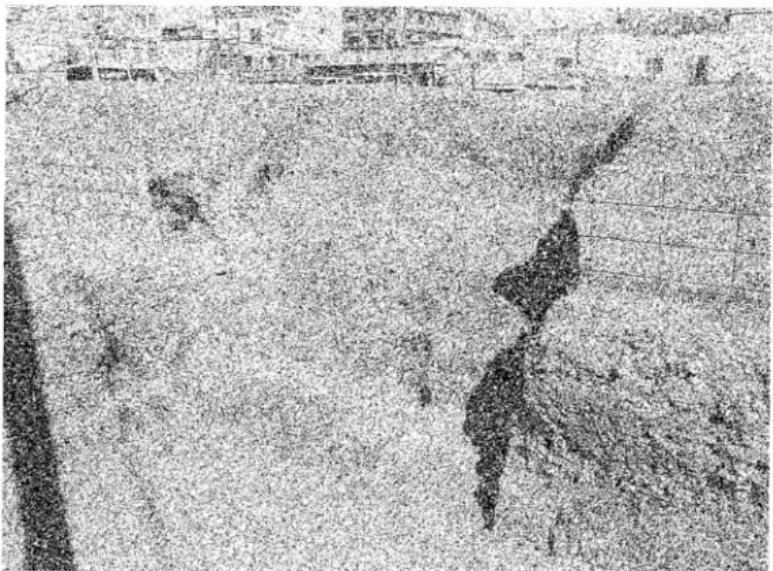
(2) 発掘調査地全景（東から）

長岡京跡右京第789次調査

図版八



(1) 開田城西側土壠（南から）



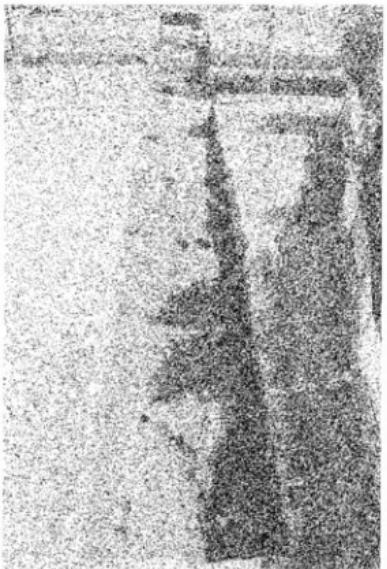
(2) 土壠と西側の堀（南西から）



(1) 南北トレンチ全景（北から）



(2) 南北トレンチ全景（南から）



(3) 東西トレンチ全景（西から）



(4) 東西トレンチ西部（東から）

長岡京跡右京第789次調査

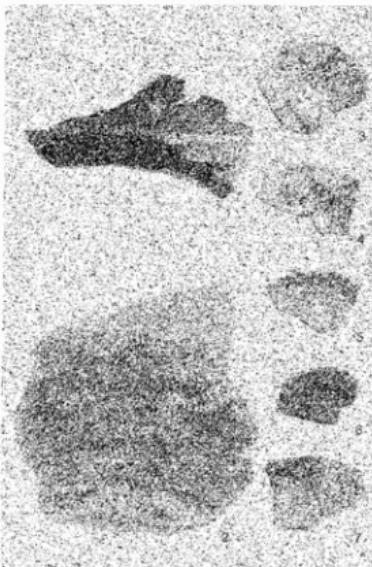
図版
一〇



(1) 東西トレンチ東部（西から）



(2) 東西トレンチ西部下層遺構（東から）



(3) 出土遺物



長岡京市文化財調査報告書 第46冊

平成16（2004）年3月28日 印刷

平成16（2004）年3月30日 発行

編 集 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の1

電話 075-955-3622 FAX 075-951-0427

発 行 長岡京市教育委員会

〒617-0826 京都府長岡京市開田一丁目1番1号

電話 075-951-2121㈹ FAX 075-951-8400

印 刷 株式会社 きょうせい 関西支社